

---

# 学園ラヴィング-GBT-

むぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園ラヴィング - G B T -

### 【Nコード】

N7406X

### 【作者名】

むぎ

### 【あらすじ】

夏休み明け早々遅刻した松田零音<sup>まつだれおん</sup>は、転入生・日立あいねと階段の踊り場で正面衝突する。そのまま本鈴を聞いた零音は、諦めて転入生を教室まで案内する。

直後、所属する生徒会（学園防衛隊）（G B T）に日立あいねに近付くなどという怪文書が届く。気になった零音は会長であり兄・波韻<sup>はいん</sup>や副会長の花澤盟の制止も聞かず、あいねに接触するが、完全に拒絶される。自棄になった零音はあいねの素性を知るまで絶対に諦めないと誓う。

姉・美里<sup>みりあ</sup>亜の計らいで、零音は別塔の踊り場であいねと二人きりになるが、突然地面が揺れ、校庭に巨大な象が現れた。あいねは象を見るなり校庭へ走って行ってしまった……。  
ラヴィング学園パロディ。

2009年頃書いたものです。手元では完結しています。

pixivに掲載予定、自サイトに掲載済みです。

予鈴が鳴った。俺は走った。靴を下駄箱に放りこみ、上履きを手に持つ。夏休み明け早々遅刻とは我ながら残念だが、明日からは生活習慣を見直そう。三階まで後二十秒もあれば充分だ。階段を二段とばして駆け上がる。二階の踊り場を曲がった時、何かと思いい切りぶつかった。悲鳴が聞こえて、俺は尻もちをついた。

気付くと、女の子が目の前で同じように尻もちをついていた。驚いたことに、髪の毛が銀色だった。スカートの中が見えているが、不可抗力だろう。

「ごめん、怪我してない？」

俺は立ち上がって、女の子に手を差し出した。女の子は緑の目で俺を見上げた。カラーコンタクトというやつだろうか。女の子は俺の手を取って、立ち上がった。

「あの、職員室って、どっち？」

女の子は無表情のまま、可愛い声で言った。職員室は二階だが、遠い。

「あっちに真っ直ぐ行って、左に曲がった左手。ちょっと遠いけど」  
女の子は俺の指した方の廊下を見た。白いワイシャツに、灰色のブリーツスカート、黒い靴下、黒い鞆、白い上履きを履いている。  
うちの制服ではない。うちの制服はスカートが赤と紺のチェックで、同じ柄のリボンをつける。案内してあげたいのは山々だが、俺には時間がない。飛んでいった上履きを回収して、片手を上げた。

「じゃあ」

鐘が鳴った。本鈴だった。俺の中で何かが終わった。いや、急げばまだ間に合うのではないかと思ったが、心が折れてしまったので諦めることにした。

「一緒に行こうか」

泣き笑いしたい気持ちを抑えながら、俺は職員室の方へ歩き出した。女の子がついてくる。夏休み明け早々遅刻とは、トイレ掃除行きかもしれない。けれど不思議な女の子に会えたからよしとしたい。何事もプラス思考だ。

「転入生？」

俺は半歩後ろの女の子に尋ねた。女の子は頷いた。

「何年生？」

「一年」

「何組？」

「忘れたけど、先生の名前は覚えてる」

職員室に着いた。職員室のドアを開けると、冷たい風があふれ出す。ここは学校内でクーラーがついている数少ない聖域なのだ。丁度、こちらへ来る担任と目が合った。急げば間に合ったのだと分かって、悲しい気持ちになった。

「何してる、松田」

担任は言った。教師の中では二十九歳と若く、顔もそこそこで、歯に衣着せない物言いから女生徒に人気がある。

「いや、今まさに転入生を職員室まで案内しました」

担任は俺の後ろに立っている女の子を見る。

「日立あいねか？」

女の子は俺の後ろで返事をした。

「転入初日から遅刻とは、肝が据わってるな」

「構内で迷ってしまって。すみません」

「あと俺が彼女に思いつきり正面衝突したので」

「お前も遅刻か」

しまった。墓穴を掘った。

「まあいい。人助けはいいことだ。特別にお前らの遅刻は0・5にしておいてやる」

0・5の意味が分からないが、聞くと面倒臭そうなのでやめてお

「うう。」

「というか本鈴鳴ってますよ」

俺は言った。

「そこは流せ」

担任は言った。俺達は聖域の外に出た。

「というか、この子うちのクラスの転入生なんですか？」

「今更か。遅いな松田」

1-Cの教室に着いた。担任が入っていくと、教室は静かになる。俺は女の子の後に続いて入って、自分の席についた。担任と転入生と一緒に来るなんて、変な噂が立ちそうだ。

「では始めるが、とりあえず転入生の紹介をする」

担任は女の子にチヨークを渡す。「一応名前を書いてくれ」女の子は黒板に縦書きで名前を書く。『日立あいね』平仮名だったのか日本人なのだろうか。

「日立あいねです。よろしくお願いします」

クラスメイトの男子一人が挙手する。

「髪の毛は地毛なんですか」

「地毛です」

地毛だったのか。

「目も？」

誰かが言った。日立さんは頷く。

「ハーフなの？」

日立さんは黙った。もしかして家庭の事情に触れてしまったのだろうか。教室が静まり返る。

「お前ら、アイドル質問会じゃないんだぞ。日立の席は藤崎の隣だ。座れ」

担任が俺の左斜め前の空席を指して言った。夏休み前は空席なんてなかったのに、いつの間に置いたのだろうか。空席の机の上に、「日立の席」とマジックで手書きで書かれたコピー用紙が張っていた。担任が書いたのだろうか。軽いいじめになっていないだろう

か。日立さんは空席に座った。

「日立さん？ 俺、藤崎ジーク。よろしく」

日立さんの隣になったジークが早速挨拶をしていた。ジークはイギリスからの留学生だ。赤毛に茶色い目で、日本人とのハーフラしい。

「うるさい。藤崎。黙れ」

担任が言った。ジークは頬をふくらませた。

「九時から体育館で始業式だ。遅れるなよ。では待機」

担任が教室を出ていく。教室内は一気に騒がしくなった。

「レオン、何で担任と日立さんと一緒に来たの？」

ジークが俺を振り返って言う。ジークの席は俺の前だ。

「話せば長い」

「何それ。怪しいな。初日から転入生に手出したの？」

「違う。道に迷ってた所を案内したの」

「何だよ。レオンが相手じゃ勝ち目ないじゃんか」

「意味が分からない」

「レオン」

誰かに呼ばれた。長い黒髪の、青い目をした女の子が俺の側に立っていた。

「今日、放課後お昼持参で生徒会だつて。ハインが伝えてくれて」

松田美里亜、学級委員長であり、俺の姉である。姉だが、諸事情により学年が同じだ。俺が頷くと、ミアは日立さんに話しかけた。

「日立さん、体育館分らないでしょ？ 一緒に行こう」

学級委員長らしい見事な気配りだ。日立さんは驚いたのか黙っていたが、頷いた。

今日は弁当を持ってきていないので、購買で焼きそばパンと、メロンパンと、カツサンドと、クリームパンと、いちごみるくを買って、生徒会室に向かった。ドアを開けると、冷たい風があふれ出す。ここも学校内でクーラーが効いている数少ない聖域だ。

「遅かったな、レオン」

「遅かったわね」

生徒会室には既に人がいた。お誕生日席のいい椅子に座っているのは、松田波韻、俺の兄だ。生徒会会長連続就任年月歴代一位で、教師陣にも多大な影響力を持つ。というのも、確かハインは担任と同年だったはずだ。どうやって学校に居座り続けているのかは、聞いてはいけない。

ハインの隣に座った、長いカールした黒髪を後ろで一つにまとめている女性は、花澤盟、生徒会副会長連続就任年月歴代一位だ。確か盟もハインと同年だったはずで、学校の内政はこの二人に支配されているといっても過言ではない。

「またそんなに食うのか。若いな」

机に置いたパンの山を見て、ハインは言った。俺は末席に座った。

「今年は卒業できそうなのか？ 二学期は大事だぞ」

俺は言った。ハインはいい椅子にもたれた。

「卒業しないだけだ」

「母さんが嘆いてたぞ」

「家には金を入れている。レオン、お前も人のことは言えないと思うが」

痛い所をつかれた。俺は紙パックのいちごみるくにストローをさした。

「俺はまだ許容だ。四捨五入しても三十じゃない」

「それは私に対する当てつけかしら」

盟が言った。

「盟も卒業しろよ」

「私は社会には興味がないの」

わがままな大人達だ。ハインは机の上で肘をついて、手を組み合わせた。

「高校生は十五歳から十八歳までという決まりは、ない」

「ちよっと格好よくごまかそうだったって駄目だからな。問題そこじ

やないし」

何十年も学校に居座り続けているという、その一点のみが問題だ。  
「ところでレオン、お前今日転入してきた生徒にもう手を出したら  
しいな」

いちごみるくが気管に入った。むせた。

「早いわね。何でかしら。若さ？ ハーフだから？」

松田家は波韻、美里亜、俺・零音の三兄弟で、父は日本人、母は  
イギリス人だ。なので俺は英語が喋れる。おかげで英語のテストは  
楽勝だ。ハーフに生まれてよかったと思う。

「やっぱりイギリスの血のせいなのかしら」

こちらがむせているのをいいことに、好き放題言いやがって。

「デマだ。誰が言ってたんだ」

「藤崎」

ハインと盟の声が重なった。あいつ、後でしめる。

「日立あいね、だったか。日本人なのか？ 髪の毛が銀色だったが」

「地毛だとは言ってた」

「あの若さで銀髪の毛は地球上に存在するのか？」

十何年間、高校に居座り続ける生徒会長も地球上に存在するのか  
聞いてみたい。

「それより、今日は何で呼んだんだよ」

俺は焼きそばパンをかじりながら言った。ハインは手を打った。

「GBT宛に謎の文書が届いた」

ハインは白い封筒を取り出した。GBTとは学園防衛隊のことだ。  
とハインが言っていた。生徒会〓学園防衛隊らしい。メンバーはハ  
イン、盟、俺の三人だ。何から学園を防衛するのは、ハインのみ  
ぞ知る、である。

ハインは封筒の中身を机の上に広げる。どこにでもあるコピー用  
紙に、やたらと真っ直ぐな文字がボールペンで書かれていた。定規  
を使って書いたのだろう。

「日立あいねに近付くな。さもなければ災いがおこる」

俺は読み上げた。

「レオン、ほぼお前宛だ」

「いやいやいや」

俺は首を振った。

「とういか何だよこれ。子供の悪戯か？」

「悪戯ではない。GBTに対する挑戦状だ」

「意味が分からない」

日立さんは始業式の時、全校生徒の前で自己紹介をしていたので、早速ついたファンに睨まれたのだろうか。でも俺が日立さんと接触したことは、1-Cのメンバーしか知らないはずだ。ふと、ジークの顔が浮かんだ。あいつ、言いふらしてるのか？

「まあそんな訳で、我々はお前と日立あいねを監視することにした」

「いや、意味が分からない」

「残念だがお前が災いに巻き込まれないようにするためだ。これに懲りて今後は軽々しく女子に手を出さないことだな」

「いや、出してないって」

硝子の割れる音がした。窓を見ると、割れた窓硝子から拳が出ていて、外に長い黒髪の女の子が立っていた。ミリアだった。硝子を叩き割ったのに、拳から血が出ていないとはさすがだ。ミリアは亡霊のように窓の鍵を開けて、窓から生徒会室に侵入した。

「ミ、ミリア、どうした？」

ハインは言った。ミリアはハインの胸倉をつかんだ。

「ハイン、あなた、また私のお饅頭を食べたわね？」

ミリアの目は、怖かった。ミリアはGBTメンバーではないので、先に家に帰って気付いたのだろうか。

「何の、ことだ」

そういえば昨日、母が饅頭を食べていたような気がするが、面倒臭いので黙っておこう。

「覚悟はいいわね？ ハイン。歯を食いしばりなさい」

「待て、ミリア、俺じゃない」

「言い訳は聞きたくない」

ミリアの右ストレートが、ハインの頬にヒットした。さようならハイン。俺はいちごみるくを飲みながら、心の中で呟いた。

担任がうちわで自分を扇いでいる。教室は騒がしい。ミリアが前で黒板に文字を書いている。『文化祭の出し物』だ。

「何かやりたいことある人」

ミリアが全員に向けて言う。ジークが挙手する。

「メイド喫茶」

どこでそんな日本語を覚えたのだろう。むしろ外国人の中では一般的なのか？ ミリアは特に却下する様子もなく、黒板に書いていく。「劇」「おばけ屋敷」「迷路」「縁日」「みんな思い思いに叫ぶ」

「ちなみに飲食店は学年で二クラスまでだからね」

ミリアは言った。一年はAからEまでの六クラスだ。

「じゃあメイド喫茶がいい人」

クラスの半分、男子がほぼ全員手を上げた。みんな素直でよい。

後、男子は仕事が楽そうだからだろう。結局、男子の力により1-Cの出し物はメイド喫茶に仮決定した。あとは学年で飲食店の枠を勝ち取るだけだ。「第二希望は劇ね」ミリアはメモを取っていた。

「もちろん男子もメイドになるのよ？」

ミリアが言った。教室が男子のブーイングに包まれる。

「いいよ。俺やるやる」

ジークが手を上げて言った。実は自分がメイドをやりたいかったのだろうか。

「楽しみだな。日立さんのメイド姿」

ジークは隣の日立さんに言った。そういうことを言ってしまうあたりがつわものだ。日立さんは特に反応を見せず、ジークを見て、前を見た。

突然、夏目漱石が読みたくなったので、図書室に寄ってから帰る

ことにした。といつても『こころ』しか読んだことがない。図書室は陽が射さないので、他の教室よりか幾分涼しい。北向きなのかもしれない。図書室に入ると、日立さんがいるのが見えた。長机で本を読んでいる。

「何読んでるの？」

好奇心に負けて話しかけてしまった。そんなに人もいないし、大丈夫だろう。日立さんは顔を上げた。黒い本の表紙には、銀の箔押しで『黒魔術』と書いてあった。聞いてはいけなかっただろうか。

「あ、俺、松田零音。同じクラスの」

「知ってる」

さすがに正面衝突した相手の顔を忘れるはずはないか。

「黒魔術好きなの？」

日立さんは俺を見て、黒い本を閉じた。

「あまり私と関わらない方がいいと思う」

日立さんは本を小脇に抱えて本棚へ消えていった。

「振られたのか、レオン」

肩を叩かれて、俺は変な声で叫んでしまった。まわりの人達に睨まれた。隣にハインと盟がいた。

「完全に脈なしね」

「というか日立あいねに関わるなど言ったのに、もう約束を破るとは」

「いや、その前にお前ら何してるんだ」

「監視」

ハインと盟の声が重なった。日立さんがドアを開けて図書室を出ていくのが見えた。

「追いかけてもいいが、監視は続くぞ。ちなみに日立あいねの家はうちの向かいのマンションの四〇一号室だ」

「ストーリーか？」

「調査だ。子供に興味はない」

日立さんのことを子供と言った時点で、もう世代が違うのがバレ

バレた。

俺は決心した。関わるなど言われたら関わりたくなるのが人というものだ。テスト前にゲームがしたくなるように、人はないものねだりなのだ。俺は日立さんを追いかけた。門を出た所で、日立さんに追いついた。

「日立さん、家近いみたいだから、一緒に帰らない？」

日立さんは俺を振り返って、怪訝な顔をした。

「家近いの？」

しまった。今の発言で俺がストーカーになってしまった。

「いや、学校からの距離が」

「近いの？」

「歩いて十五分くらい」

「私もそれくらいだけど」

日立さんが俺を見ている。視線が痛い。日立さんが歩き出して、俺は後についていく。夕焼けが赤く、影が長く伸びている。勢いで追いかけてしまったが、その後は特に決めていなかったたので、困った。

「日立さん、前はどこの学校だったの？」

「隣の学区」

「制服そのままなんだ」

「もつたないから」

一問一答になっている。何かこう、日立さんの心をつかむ話題はないだろうか。

「学校、もう慣れた？」

「まだあんまり」

「何で転校したの？ 親の転勤？」

言った後で、親の転勤で隣の学区には転校しないだろうと気付いた。日立さんは黙ってしまった。地雷を踏んでしまったかもしれない。大い。

「そういえば、隣の学区って、謎の襲撃事件とかなかったっけ。大

「丈夫だった？」

無理矢理話題を変えた。確かニュースで、動物園から逃げ出した動物が学校で暴れたと報じていた。けれどそれにしては校舎の損傷が激しいし、錯乱状態になった生徒もいるということで、謎の襲撃事件としてこちらの学区でも話題になっていた。

日立さんはエメラルド色の瞳で俺を見た。白い頬が夕焼けで赤い。「私と関わらない方がいいと思う」

「何で？」

日立さんは目を開いて、そのまま俺を睨んだ。

「何でも」

今までずっと無表情だったので、怒ったところを初めて見た。日立さんは早足になる。俺は日立さんを追いかける。

「何で？」

日立さんは振り返った。

「松田君」

名前を覚えていてくれたことに驚いたが、日立さんは無表情で言った。

「しつこい」

言葉のタライが俺の頭の上に落ちて、日立さんは夕焼けの中に消えていった。

「いただきます」

五人の声が重なった。松田家では夕食はなるべく全員で食べるようにしている。今日のメニューは白米、鯖の味噌煮、ほうれん草のおひたし、なめこの味噌汁、きゅうりの浅漬けである。母はイギリス人だが、食事は基本的に和食だ。食事中にテレビをつけないので、喋らないととても静かである。

「レオン」

ハインに呼ばれた。ハインの左頬は腫れていて、湿布が張られている。

「しつこい男は嫌われるぞ」

味噌汁が気管に入った。むせた。

「何の話？ というか、ハインそれどうしたの？」

父がにこやかに左頬をさして尋ねる。ここ数日、父は深夜帰りだったので知らないのだ。

「ごめんねハインちゃん」

母が笑いながら言った。

「ハインがミリアの饅頭を食べて殴られた」

俺は父に言った。実際の犯人は母だった訳だが。

「違う。俺じゃなかったって証明されただろう」

母は笑って、もう一度「ごめんね」と言った。

「避けないのが悪いのよ。私の手も振りほどけないなんて、軟弱にも程があるわ」

ミリアは開き直った。

「ごめんね。ミリアちゃん。でも今日はとらやのとら焼きを買ってきたから、後で食べましょう」

ミリアは目を丸くした。

「本当に？」

「とら焼き、好きだったわよね」

ミリアは頷く。

「本当に？ ありがとう」

ミリアの機嫌は一瞬にして直った。

「で、さっきハインが言いかけたのは何？」

父が言った。

「レオンが転入生にちよっかいを出して振られた」  
ハインが言った。

「ああ、この前言ってた子？」

「振られる以前に、付き合ってたないからな」

俺は語気を強めた。

「でも付き合う前から振られちゃ駄目だよな」

父が言った。確かに好かれてはいないし、むしろ嫌がられている。でも俺は決心したのだ。日立さんが関わるなど言った理由を知るまで、諦めない。

「レオン、あいねにちよっかい出してるの？」

ミリアが言った。ミリアは学級委員長の使命感からか日立さんとよく話していたが、ここ数日、目に見えて本当に仲良くなっていた。

「別にちよっかい出してる訳じゃなく、仲良くなるうと思って」

殴られるだろうか。ミリアはご飯を食べながらうなった。

「姉として弟を応援するべきかしら」

「いや別にそういうことはしなくていいけど」

「分かったわ。仲良くなりたいのね」

ミリアは一人で納得してしまった。

「何でミリアはレオンには優しくて俺には冷たいんだ」

ハインが呟いた。

「自分の胸に手をあてて思い出してご覧なさい」

ミリアが冷たく言った。多分、俺達が小さい頃、ハインがミリアに出されたおやつをよく横取りしていたからだ。そんな苦汁を舐め続けて何十年、ミリアはついに決心したのだろう。中学で薙刀部に入部し、ハインに決闘を申し込んだ。

薙刀とは、二メートルくらいある竹刀のようなもので、大和撫子が習うような武道だ。決闘はミリアの圧勝だった。武器を持った相手に素手で挑んだハインもハインなのだが、ミリアは怨念が違った。というか、多分薙刀のルールとか関係なく、ミリアは薙刀でハインをぼこぼこにした。それ以来、兄弟の間ではミリアが絶対になったのである。

「お姉ちゃんに任せておきなさい」

ミリアは微笑んだ。隣でハインが口をとがらせていた。

「よつやく借りられた『こころ』を持って、別塔の三・五階、つまり三階と四階の間に向かった。本塔は教室がある方で、別塔は職員

室や理科室やプールがある。別塔には基本的に人がいないので、一人になりたい時はここへ来る。昼休み終了まで後三十分、どこまで読めるだろうか。

三階へたどり着いた。見上げると、立ち入り禁止のロープを背にして、日立さんが階段に座っていた。日立さんは俺を見て、というか睨んで、立ち上がった。

「いや、ごゆっくりどうぞ」

日立さんは階段を降りていく。

「ここ、自分で見つけたの？」

俺は言った。

「美里亜に来てって言われた」

いきなり直球すぎるだろう。俺は心の中でミリアにつっこんだ。

「せ、せっかくだからちよっと話していかない？」

ミリアが強引に作ってくれたチャンスを逃す訳にはいかない。日立さんは俺の横を通りすぎていく。

「待って」

俺は日立さんの手首をつかんだ。丸いエメラルドの瞳が俺を見て、俺は手を離れた。

「ぐうぐうぐうめん」

我ながら大胆なことをしてしまった。多分、顔が赤くなっている。日立さんは目を伏せた。

「どうして関わるの？」

俺は日立さんに顔の赤さを悟られないよう、あさっての方を向いた。

「気になるから」

「何が？」

「どうして関わったらいけないって言うのか」

「松田君」

俺は日立さんの方を見た。日立さんの口が開く。

飛行機が墜落したような音がして、地面が揺れた。揺れが収まる

と、俺も日立さんも階段に尻もちをついていた。日立さんは素早く起き上がった、廊下の方へ走っていく。俺は日立さんの後ろ姿を追いかけた。

日立さんが窓の外を見ていた。見ると、ひび割れた窓の向こうに巨大なゾウがいた。校舎と同じくらいの背丈のゾウが、校庭を歩いている。校庭にいる生徒達は逃げ惑い、窓は野次馬の顔でうまつている。ゾウが鉄棒を踏み潰すと、地面が揺れた。

「何、で？」

俺は呟いていた。舌打ちが聞こえた。日立さんが走り出す。俺は日立さんを追いかける。

「松田君は来ないで」

日立さんは振り返りながら叫ぶ。足の速さなら自信があるのだが、日立さんとの距離が縮まらない。

「日立さんこそ、どこ行こうとしてるんだよ」

「しつこい」

本気で叫ばれた。もう自棄だ。しつこいと言われようが、ストーリーと言われようが、俺は俺の目的を果たすまでだ。

「ついてく」

俺は叫んだ。

「死んでも知らないから」

日立さんは叫んだ。

校庭に着いた。日立さんは校舎と同じ背丈のゾウを見上げた。ゾウは日立さんに尻を向けている。日立さんがゾウに手を向けた。

校庭のスピーカーから、どこかで聞いたことのあるテーマソングがフェードインしてきた。すぐに耳が割れるような大音量になる。俺は耳を塞いだ。日立さんも耳を塞いでいる。

日立さんの後ろから、黒い人影と白い人影が歩いてくる。戦隊物の衣装の、ブラックとホワイトだった。思い出した。さつきから大音量で流れているのは、日曜の朝九時からやっている『突撃戦隊スイハンジャー』のオープニングテーマだ。ブラックは仲間とみせか

け、実は敵なのだが味方に情が移り始めて葛藤している役で、ホワイトは明るいレッドと影のあるブラックの間で恋心が揺れ動いている乙女の役だ。

ブラックとホワイトはヒーローショーのようにポーズを決めた。

「学園防衛隊GBT見参」

俺は凍りついた。日立さんも凍りついている。

「待たせたな諸君。学園の風紀を乱すものは許さない」

衣装のどこかにマイクがしまれているのか、スピーカーから大音量で声が聞こえる。窓際の野次馬達が歓声を上げた。

「GBTってあの学園七不思議の？」「初めて見た」「波韻先輩、私達を守って」ブラックは校舎の窓へ向けて手を振る。ひとしきり手振り終わった後、俺に気付いたのか、こちらにやってきた。肩に手を、置かれる。

「お前も早く着替えて来い、ブルー」

俺は言葉を失った。ゾウが鳴いて、こちらへ向かってくる。

「馬鹿、刺激するからだ」

俺は泣きたい気持ちでブラックの胸倉をつかんで揺さぶった。

「安心しろ。そのためのGBTだ」

ブラックはでかい銃を取り出した。ゾウに向けて銃をかまえる。

「銃刀法違反じゃないのか」

「安心しろ。エアガンだ」

BB弾が弾け飛ぶ。ゾウに当たっているのかいないのかよく分からない。ゾウは信じられない程速いスピードでこちらに向かってきて、俺達の頭上で巨大な足を上げる。

「待て死ぬ死ぬ死ぬ」

俺は叫んだ。『死んでも知らないから』日立さんの言葉が走馬灯のように蘇った。俺は目をつぶった。そもそもハインが変なことをしなければ死なずに済んだのに。死んでもハインを恨もう。

『アリス』

日立さんの声が聞こえたような気がした。飛ばされそうな程強い

風が吹いて、世界の終わりのような音が聞こえて、地面が揺れた。

目を開けると、ゾウは校庭に仰向けに倒れて、もがいていた。

「見たか、神風の力」

ブラックが何か叫んでいるが、日立さんの姿が見えない。あたりを見回すと、日立さんはゾウのすぐ近くに立っていた。俺は走った。日立さんがこちらに気付いて、丸いエメラルドの瞳と目が合う。俺は日立さんにタックルしていた。校庭を滑って、日立さんを押し倒していた。

「何なの松田君」

日立さんは本気で怒っている。

「いや危ないと思って」

俺も叫ぶ。

「危なくない、馬鹿、邪魔」

ゾウが雄叫びを上げる。仰向けに地面に接した背中がひび割れて、中から白い羽のようなものが出てきている。日立さんの舌打ちが聞こえた。日立さんは俺に押し倒されたまま、ゾウに手を向けた。

『黒の空 隕 宙 塵 熱』

日立さんは日本語ではない何かを喋った。英語でもない。

『光年経て地に近付き 以って頭に降り注げ』

昼なのに、空が黒くなった。教室の窓からもれる明かりにゾウが照らされる。

『ザフバクト』

日立さんは叫んだ。飛行機が飛んでいるような音がして、空から何か降ってきた。巨大な岩が、ゾウの体にぶち当たる。次から次へと岩が降ってきて、ゾウの体を埋めていく。ゾウは鼻を上げて鳴いた。力なく下ろされた鼻に、落ちてきた岩が直撃した。ゾウの体が痙攣したかと思うと、ゾウの輪郭は曖昧になり、砂のように崩れていった。ゾウを押し潰していた岩も砂になって流れていく。校庭に何もなくなると、空が明るくなった。

静寂に、歓声と拍手が溢れた。

「諸君、G B Tがいる限り、この世に悪は栄えない」

それ、どこかで聞いたことあるぞ。歓声と拍手が大きくなる。「  
というか何？ 今の何？」「G B Tの奥義じゃないの？」誰かが窓  
から叫んでいる。ふと、肩を押しつけられた。日立さんだった。

「ごごごごめん」

日立さんは無言で俺の下から出ていった。いくら助けようとした  
とはいえ、大胆すぎた。絶対顔が赤い。日立さんは服の砂を払って  
歩き出す。俺は立ち上がって、日立さんの手首をつかんだ。エメラ  
ルドの瞳と、目が合う。

「説明してもらえるまで、離さない」

エメラルドの瞳が、細くなった。

俺は正座していた。目の前には猫脚の白いテーブルがある。フロアリングの床、落ち着いたピンク色のラグに、お揃いの色のカーテン、家具はすべて白の、ドールハウスのような部屋だった。日立さんがお盆に麦茶を二つ乗せて戻ってきた。

「何で正座してるの？」

先程の、自分でも大胆だなと思う言葉の後、なぜか日立さんの家に招待された。知らなかったが、一人暮らしらしい。説明するのに人に聞かれないからということだと思うが、一人暮らしの部屋に男子を上げるのはどうなのか。むしろまったく心配がないという自信の表れだろうか。

日立さんは麦茶をテーブルに置いて、向かいに座った。「いただきます」俺は麦茶を飲んだ。気付くとコップが空になっていた。日立さんは無言で、空になったコップを取り上げて台所へ行ってしまった。開け放たれたドアの向こうが台所で、あまり詳しくないが、1Kというやつだろう。

「あの、聞いてもいいかな」

日立さんの後姿に声をかける。「どうぞ」日立さんは麦茶の入ったコップを持って戻ってくる。礼を言っコップを受け取った。

「あの隕石は、日立さんがやったの？」

日立さんは俺の向かいに座って、麦茶を一気飲みした。喉が渴いていたのだろうか。空のコップを持って、台所へ行ってしまった。答えないつもりか？

「苗字、嫌いだから名前にして」

日立さんが台所から言った。意図が分からない。男子を一人暮らしの部屋に上げて、更に名前で呼べとはどうということなのか。

「あ、あいねさん？」

「恥ずかしい。何で俺の方が恥ずかしくならないといけないのだ。」

「さんとかいらぬい」

「日立さん、もといあいねさんは麦茶の入ったコップを持って戻ってくる。でも今、さんはいらぬいって言ったか？ 何をさせたいんだ。」

「呼び捨てにしるってこと？」

「同級生だからさんとかいらぬい」

「慌てふためいている俺に比べ、あいねさんはとても落ち着いている。本当に、本当に何の意図もないのか？ 王様は家臣を人間と思っ  
ていなかったから、家臣の前でも平気で着替えられたとかいうあれと同じか？」

「あ、あいね？」

「恥ずかしい。あいねさん、もといあいねは麦茶を飲みながら頷いた。」

「あの隕石は、あいね、がやったの？」

「頭がパニックで質問どころではないのだが、質問しなければいけない。あいねは俺を見ずに頷いた。」

「どう、やって？」

「あいねと目が合った。エメラルドの瞳がこちらを見ている。」

「何が知りたいの？」

「俺は上を見た。指を折る。」

「あの隕石をどうやったのかと、何でゾウがいたのかと」

「言葉が詰まった。「とりあえず、その二つ」

「松田君」

「レオンでいいよ。俺も呼び捨てなんだし」

「エメラルドの瞳が丸くなった。すぐに睨まれる。」

「じゃあ零音、死んでもいいのね？」

「そんなに生死に関わる話なのか。あいねがこれ程までに関わるなという理由を知りたいのだ、仕方がない。俺は頷いた。エメラルド

の瞳が細くなった。

「隕石は、魔法」

「魔法つて、ゲームとかに出てくるやつ？」

あいねは頷いた。

「魔法が使えるの？」

頷く。

「何、で？」

「それは、教えない」

「教えてくれる約束じゃなかったのか」

「だって、さつきそれは知りたいつて言わなかったから」

謀られた。悪徳商法のようだ。

「遺伝とかなの？」

あいねの口は開かない。本当に教えないつもりか。

「孤児だから、本当の親はあんまり覚えてない」

地雷を踏んでしまった。

「ごめん」

「別に、あんまり覚えてないから大丈夫」

あいねと目が合う。

「疑わないの？」

あいねは言った。

「何を？」

「魔法のこと」

でも実際、隕石を見ているのだ。後はあれをあいねがやったというのが本当かどうかだ。

「今、できるの？ 魔法」

「隕石じゃないやつだったら」

俺も死にたくないなので、頷いた。アイネは手の平を俺の前へ差し出した。

『ニーロ』

手の平から、赤い炎が立ち昇った。何も無いのに、燃えている。

ガスバーナーのようだ。あいねは炎を握りつぶした。

「何語？」

「教えない」

あいねは即答した。

「もつと長くなかったっけ」

「強いやつの方が呪文が長いの」

「長いやつはできないの？」

あいねはやや考えるように黙って、両手を胸の前へ出した。

『透の水面 海 光 風 水 気 風の力受けて深く 以ってこの地に満ち足りれ』

あいねは両手を広げた。

『リディレク』

目の前に、水が溢れた。比喻ではなく、テレビで見るとも綺麗な海の中に、いた。テーブルも家具も水につかっている。このままだと息が続かなくて溺れるのではないだろうか。あいねを見る。あいねが水の中で手を叩くと、水は跡形もなく消えた。服も、部屋も濡れていない。俺はあいねを指差した。

「イリユージョン？」

「だから、魔法」

あいねは言った。俺は頷いた。正座していた足を崩すと、感覚がなかった。これはまずいパターンだ。

「魔法は、すぐよく分かった。後、ゾウのことなんだけど」

あいねは立ち上がって俺の側へ来る。しゃがんで、俺の足を思い切り叩いた。俺は絶叫した。エメラルドの瞳がこちらを睨んでいる。

「追いかけてこなかったら、あんなに大事にはならなかったのに」

「だって戦えるなんて知らなかったから、危ないと思って」

「後、あなたに言うのもなんだけど、あの戦隊物、何？」

俺はあいねの両肩をつかんで揺さぶった。

「あいつらとだけは一緒にしないでくれ。というか大事になったのって、99.8%あいつらのせいじゃないのか」

あいねが冷たい目でこちらを見ている。我に返って、手を離した。  
「ううううううめん」

「零音って、日本人じゃないの？」

「母親がイギリス人で父親が日本人だけど、何で？」

「すごく触られるから」

俺は自分がいたたまれなくなつて、あいねから目をそらした。絶  
対顔が赤い。

「ご、ごめん。でも一応日本育ちなんだけど」

でもそういえば、両親とはよくキスをしていたし、両親もよくキ  
スをしていたし、というか今も出かける前に玄関でしているし、昔  
同じ感覚で幼稚園の先生にキスしたら、周りからからかわれて、そ  
の時うちは特殊だったんだと気付いたことを思い出した。でもここ  
は日本なので、異性のクラスメイトをそんなにぺたぺた触る訳には  
いかない。

「それで、あの、ゾウのことなんだけど」

あいねは立ち上がつて、テーブルの向かい側へ戻つていった。

「何で謎のゾウが学校に？」

「隣の学区の襲撃事件覚えてる？」

動物園から逃げた動物が学校を襲撃したという、あれだ。覚えて  
いるも何も、数日前あいねに尋ねたばかりではないか。

「あれと、同じ」

「襲撃事件を止めるために戦つてるってこと？」

あいねは目を伏せて首を振った。

「その逆」

俺は頭の中を整理する。

「自分で襲撃させて、自分で退治してる訳、ではないよな」

あいねが冷ややかな目で俺を見る。

「いや、だから違うよなつて言っただろ。襲撃事件があつたのつて、  
あいねが前いた学校だったの？」

あいねは頷いた。

「じゃあ、狙われてるってこと？」

「多分」

「狙われる心当たりは？」

あいねは黙った。

「あるの？」

「特定の人は思い浮かばない」

「男子を冷たくあしらったとか」

睨まれた。けれど、あいねを狙っている誰かは、少なくとも巨大なゾウを操ることができるのだから、普通の人間ではない。

「犯人は、きつと近くにいるんだよね？」

「知らない」

あいねは即答した。

「いや、絶対近くにいる」

「その自信、何？」

だって学校内にいないとあいねを狙えないではないか。前の襲撃事件もそうだが、まだ死傷者は出ていない。犯人は意外と慎重で、あいねだけを狙っているに違いない。今日殺されそうになったが、それは計算外ということにする。ゾウも犯人もよっぽどブラックがうざかったのだろう。

「明日から学校休もうと思ってたんだけど」

「駄目だ。結局どこへ逃げてでも狙われる。このままじゃ卒業できなくなるぞ」

あいねは目を伏せる。俺が言うと説得力があるだろう。

「話してくれたお礼に、犯人を見つけるよ」

エメラルドの瞳が困惑して俺を見る。

「何でそこまでするの？」

「仲良くなりたいたいから」

あいねは目を丸くした。視線がそれる。気のせいか、あいねの頬が赤くなった気がする。

「イギリス人」

あいねはとても小さな声で、言った。

更衣室から出て、プールに繋がるドアから顔を出して、空を見上げる。とてもよく晴れていて、暑くて、絶好のプール日和だ。向こうのドアから女の子特有の高い声が聞こえてくる。ミリアと、あいねが喋りながらプールサイドに出てくる。

「あいね、胸おっきいね」

ミリアは真顔で、あいねの胸をわしづかみにした。あいねは悲鳴を上げてミリアの頭を叩く。ミリアは笑いながら謝っている。

「いいなあ。分けて欲しいなあ」

別にミリアも胸がないとかそういう訳ではないのだが、確かにあいねは俺から見ても胸が大きい。あいねと目が合った。すごく睨まれた。

「レオンのえつち。何見てるんだよ」

背後から声が聞こえて、俺は叫んだ。ジークが立っていた。

「おどかすなよ馬鹿」

「別に。やましいことがあるから驚くんのだろ。何？ 日立さん？

スクール水着なのにスタイルいいよな」

ジークは笑顔であいねに手を振って、睨まれていた。

「松田姉もスタイルいいなあ」

「ハーフだからだろ」

「俺は松田さんでもいいな。今度紹介してよ」

「お前は女だったら誰でもいいんだろ」

「貴様ら何をやってる。死にたいのか」

プールサイドから坊主頭に髭の体育教師が叫んでいる。気付くと他のクラスメイトはプールサイドに集合していた。

「いや、すみません、死にたくないです」

俺は叫んで走った。本当に殺されかねない。

「プールサイドを走るな。死にたいのか」

男子達から笑い声が上がった。恥ずかしい。ジークはマイペース

に歩いてきて、列に加わった。

「準備体操始め」

軍隊のような体育教師の掛け声で、前に出っていた体育委員が体操を始める。ラジコ体操第一だ。

「なあジーク、昨日のゾウ見た？」

あまり大声で喋ると怒鳴られるので、小声で隣に聞いた。

「見た見た。あれって、例の襲撃事件ってやつ？」

今朝、ニュースを見たら、うちの学校が映っていた。正門にはマスコミが張りつき、生徒達は捕まって質問を浴びせられていた。臨時の全校集会も開かれたが、マスコミにはあまり関わらないこと、次に同じようなことがあつたら、教師の指示に従って避難するようにとしか言われなかった。

「あれって、誰が犯人だと思う？」

俺は言った。

「誰がつていうか、犯人とかいるの？ 人間？」

そうだった。あいねの魔法を見てからすっかり気分がファンタジーだったが、普通に考えればありえない。自分で探すしかなさそう  
だ。

「ゾウがいた時、怪しい人影とか見なかった？」

「みんなゾウに夢中だったしなあ。というか犯人、人間なの？」

「俺は人間だと思ってる」

「貴様ら、先程から死にたいようだな」

体育教師が俺の横に立っていた。俺は首を振った。

「死にたくないです」

「先生、何が駄目だったの？ 体操ちゃんとしてるじゃん。私語？」

「私語に決まっているだろう。一学期から言い続けているのにまったく改善が見られないとは、死にたいと思えん」

「俺、日本語分からないんで」

「流暢な日本語でふざけるな留学生。貴様らはバタフライ十本追加で泳げ」

ジークが頬を膨らませる。

「先生、バタフライの泳ぎ方が分かりません」

俺は言った。

「バタフライとはこういう泳ぎだ」

体育教師は叫びながら、プールに飛びこんでいった。盛大な水しぶきの後に、向こう側の女の子達から、かすかな笑いが起こった。

生徒会室のドアを開けると、ハインがお誕生日席のいい椅子に座ってテレビを観ていた。正確にはDVDで、スイハンジャーが戦っていた。隣には盟も座っている。机の上にはDVD・BOXがあった。大人買いたしたようだ。ハインと盟は俺をいないものとしてテレビに見入っている。

「ハイン、名簿貸して」

ハインの名簿とは、生徒から教師まで、学校に所属する全員のプロフィールが載っている恐ろしい代物だ。盟やハインファンクラブ協力の下、ちゃんと年度毎に更新されている。

「日立あいねのプロフィールならまだ載っていないぞ」

ハインはテレビから目をそらさずに言う。

「いや、あいねはいいから」

ハインが素早く俺を見る。濃い青い目が見開かれていた。何かまじっただろうかと思っ、気付いた。あいねを名前で呼んでしまったからだ。

「レオン、お前、昨日、日立あいねに手を出してしまったのか」

「いや、出してないから」

「家に行ったらすることなど一つしかないだろう」

俺は頭を抱えた。昨日のことといい、そろそろこいつの弟をやめたい。

「富士の樹海で迷子になれ。とりあえず、名簿」

「用途を言え」

「昨日のゾウを操ってた犯人を捜す」

ハインは目を細めた。

「あれは人間の仕業なのか？」

「俺は人間だと思ってる」

ハインは立ち上がった。いつの間にか静かになったと思ったら、盟がテレビにイヤホンをさして一人で聴いていた。ハインは机の上に分厚い黒いファイルを二冊置いた。

「ちなみに生徒会室外には持ち出し禁止だからな」

俺は机の上に鞆を下ろした。家で調べようと思っていたのだが、仕方がない。ハインはイヤホンを引き抜いてテレビに戻っていた。普通にうるさい。

とりあえず名簿を借りてはみたが、何を調べればいいのか。犯人はあいねを狙っていて、この学校にいるかもしれないということしか知らない。しかも、学校にいるかもしれないというのは完全に俺の勘だ。犯人は何が目的であいねを狙っているのだろうか。あいねの存在がファンタジーだからか？ 考えても分からなさそうなので、とりあえず1-Cのページを見てみることにした。

名簿には本人写真と名前、生年月日、住所、電話番号、身長、体重、視力、足のサイズ、両親の名前、趣味、好きな人、将来の夢などストーリーカーなら生唾ものの情報が満載だった。噂には聞いていたが、これ程までとは。

藤崎ジーク、身長・180cm、体重・60kg、将来の夢・生け捕りの名人になること、特記事項・留学生。

何が真実で何が偽りなのか分からない。満面の笑みでピースをしている写真が貼られている。盟が撮ったのだろうか。ページをめくると、あいねのページがあった。まだないと言っていたのに、恐ろしい。他のページに比べて空欄が目立つ。

日立あいね、身長・約160cm、特記事項・髪の毛が銀色（地毛）。

特に手がかりになりそうな情報はない。写真もまだない。めくると、ミリアのページだった。

松田美里亜、身長・157cm、体重・47kg、将来の夢・お嫁さん、特記事項・怖い。

特記事項がすごく主観的だが、誰が書いたのだろう。ハインか？めくると、俺だった。

松田零音、身長・183cm、体重・65kg、将来の夢・サラリーマン、特記事項・むつつり。

俺はページを破りたくなった。

ドアが開く音がして、俺は反射的にファイルを閉じた。「レオン、いたいた」ジークだった。ハインと盟はテレビに夢中でジークのことはどうでもいいようだ。

「何？」

「明日神社でお祭りがあるじゃん。松田姉を誘いたいんだけど、二人つきりだと難しそうだから、日立さんも誘って四人で行こうよ」

「ミリアを誘うなど俺が許さん」

ハインはテレビから目をそらさずに言った。

「会長には関係ないじゃん」

ジークは頬を膨らませる。

「関係ある。俺はミリアの兄だ」

「いや、関係ないと思うぞ。ミリアに聞いとくよ」

俺は言った。

「俺を通さず話を進めるな」

ハインはテレビから目をそらさず言う。

「お前はまずテレビから離れる」

ミリアが行くといえ、あいねも来てくれるかもしれない。仲良くなるチャンスだ。

「お約束でちゃんと途中ではぐれるからさ」

ジークが小さな声で言った。

「駄目だ。どうしても行くとこのなら俺も混ぜる」

「人と話をする時にテレビから目を離さないやつなんかとは一緒に行きたくない」

ハインはようやくテレビから目を離して、俺の方を見た。

「俺も混ぜる」

「でもやっぱりお前が来たらミアもあいねも来なさそうだから駄目」

「話が違つぞレオン。嘘つきは泥棒の始まりだ。断じて許せん」

「別に俺達と一緒に来なくても、盟と一緒に行けばいいだろ」

「零音、さりげなく面倒をこっちに押しつけないで頂戴」

盟がテレビから目をそらさず言った。

「とりあえず、松田姉は絶対誘つてくれよ。決まったらメールして言っただけ言つて、ジークは生徒会室から出て行つた。」

夕食の後、ミアの部屋をノックした。中から返事がして、ドアが開いた。

「なあに？」「ちよつと相談があつて」

俺は素早くミアの部屋に入り込むと、ドアを閉めた。

ミアの部屋はあいねの部屋と似ていて可愛いのが、一角だけ藁人形やら薙刀やら防具やら黒い本やらが置いてある。もしかしてあいねとは黒魔術の話で仲良くなったのだろうか。

「何？」

「いや、ハインには内密にしてほしいんだけど」

「言われなくても話さないわよ」

俺は頷いた。

「明日、神社のお祭りがあるだろ？ ジークがミアと行きたいって言つてて」

「藤崎君？」

「で、あいねも誘つて、俺とミアとジークの四人で行かないかって」

ミアは考えるようにあごに手をあてていたが、薄く笑つた。

「あいねと一緒に行きたいのね？ 一対一じゃ誘つても来ないから俺は言葉に詰まつた。」

「分かったわ。行ってあげる」

ドアが勢いよく開いた。

「許さん」

硝子のコップを持ったハインが立っていた。場が静まり返った。

ミリアは無言で部屋の黒い一角から、薙刀を取った。

「待て、ミリア」

ハインは明らかに動揺している。ミリアは笑顔で、言った。

「死になさい」

俺は目をつぶった。悲鳴が聞こえた。何も聞こえなくなって目を開けると、開いたドアの前には誰もいなくなっていた。ミリアは薙刀を黒い一角に戻した。

「じゃあ、あいねは誘っておくから。頑張るのよ」

ミリアは笑顔で俺の肩を叩いた。俺は部屋の外へ出たが、そこにはもう誰もいなかった。俺は心の中でハインに祈りをささげた。

「はい、できた」

父に肩を叩かれた。「ありがとう」ジークが絶対に浴衣で来いというので、父に着付けを手伝ってもらった。この年になって手伝ってもらうのも恥ずかしいが、一人では着られないので仕方がない。

「レオンは足が長いから不思議な感じだね」

「変?」

「変ではないけど、外国人が着てる感じ」

半分、日本人ではないのだから仕方がない。うちわを持って出かけることにした。待ち合わせの一時前前から家にいるなどミリアに言われたので、先にジークとふらふらしていることにしたのだ。

玄関のチャイムが鳴った。インターホンの近くにいたので、受話器を取った。「どちら様ですか?」やや沈黙があった。「日立あいねです」俺は沈黙した。「ええと、開けるから、ちよっと待って」俺は玄関へ走った。

ドアを開けると、制服ではないあいねがいた。真っ白のワンピース

スにサンダルを履いている。私服を見るのは初めてだ。ミリアが玄関にやって来た。

「いらっしやい。レオンは行ってらっしやい」

ミリアに背中を押された。「お邪魔します」入れ違いにあいねが家にかかる。

「あいねは胸がおつきいからタオルたくさん巻かないといけないわね」

あいねはミリアの頭をはたいた。「あ、レオン、ちょっと待ってミリアが玄関へ戻ってくる。ショートパンツのポケットから何かを取り出して、俺の手に握らせた。絆創膏二枚だった。

「何?」「多分、そのうち分かるわよ」

ミリアがあいねの方へ戻っていった。俺は首をひねって家を出た。

待ち合わせは神社の鳥居の前だった。空はもう暗くなっていて、同じように待ち合わせをしている人が沢山いた。

「楽しみだな。二人の浴衣姿」

「別に浴衣で来るとは聞いてないけど」

「分かっただけいなレオン。祭りといえば浴衣だろ」

そんなジークは浴衣とうちわがまったく違和感なく似合っている。ハーフなのに。

「あ、来た」

ジークがうちわで向こうを指した。青緑色の浴衣を着たミリアが手を振っている。

「時間通りね。偉い偉い」

ミリアは俺の肩を叩いた。あいねがミリアの後ろにうつむいて立っていた。薄紫色の浴衣で、髪を後ろでまとめている。

「浴衣二人分あったの?」

俺はミリアに尋ねた。

「お母さんのコレクションから借りてきたのよ」

母は日本人より日本が好きだが、浴衣コレクターだとは知らない

かった。

「二人共可愛いね」

ジークが笑顔で言った。何のためらいもなく言える所が、俺には真似できない。ジークはミアアの隣に行く。

「松田さんだと紛らわしいから、ミアアって呼んでいい?」

「ほぼ初対面で度胸があるわね。藤崎君」

「同じクラスじゃん」

「喋ったことないもの」

俺達は神社の境内へ向けて歩き出した。両側に屋台が沢山出ている。ジークがミアアの隣に行ってしまったので、必然的にあいねの隣になった。あいねはうつむいている。

「何か食べる?」

俺はあいねに尋ねた。

「食べる。焼きとうもろこし」

ミアアが振り返って言う。

「ミアア、渋いね」

ジークは早速、名前で呼ぶことにしたようだ。

「あいねも食べようよ」

ミアアに話しかけられて、やっとあいねは顔を上げた。髪の毛を上げているので、新鮮だ。あいねは声を出さずに、頷いた。

「じゃあ、焼きとうもろこし四つね。藤崎君、行くわよ。二人は待ってて」

ミアアはジークの腕を引っ張って、人ごみをかき分けて行ってしまった。相変わらずの強引さだ。人の流れから端に避けると、あいねがついてくる。やっぱりうつむいている。

「何か、ごめん、急に誘っちゃって」

「別に」

怒っているのだろうか。よく分からない。

「浴衣よく着るの?」

アイネは首を振る。ここで可愛いねとかジークのように言えたら

いいのだが、恥ずかしくて言えない。でも本当に似合っていると思う。

「慣れてないから、変な感じ」

「いや、似合ってる、と、思うよ」

思ったより大声になってしまった。驚いたのか、あいねは顔を上げる。目が合って、目をそらされる。

「ありがとう」

すごく小さい声で言われた。何だろう、この中学生のような甘酸っぱい感じは。

「零音は浴衣よく着るの？」

ようやくあいねはまともにこちらを見てくれた。

「いや、ジークが着てこいつて言うから。父さんには不思議な感じって言われた」

「似合ってると思う、けど」

あいねは目をそらす。

「あ、りがとう」

学校で会つと怒られることがほとんどだったので、変な感じだ。

「あれから変なものには襲われてない？」

あいねは頷いた。「大丈夫」沈黙が場を支配する。気まずい。もしかしてジークとミアはもうはぐれたのだろうか。焼きとうもろこしはおとりだったのか？

「ミアに電話してみようか」

俺は懐から携帯電話を取り出した。ミアにかける。何回か呼び出し音がして、留守番電話サービスに接続された。気付いていないのか、無視しているのか。すぐにメールが来た。

『迷子になった。頑張れ。ミア&ジーク』

どうやら焼きとうもろこしは買ってきてもらえないらしい。

「迷子になったって」

あいねは何も言わなかった。ミアと合流したがるかと思ったが、意外だ。

「とりあえず焼きとうもろこし買つ?」

あいねは頷いた。手近な屋台に寄ると、頭にねじりタオルを巻いたおじさんが、網の上でとうもろこしを転がしている。

「二つください」

「お、いいねえ。デートかい? 青春だねえ」

言葉に詰まった。傍から見たら、そう、見えるのか。あいねに焼きとうもろこしを渡す。

「お金」

あいねは巾着から何か出そうとした。多分、財布だろう。

「いいよ。焼きとうもろこしくらい」

あいねは手を止めて、うつむいて巾着の口を閉めた。

「じゃあ、わたあめおごる」

なぜわたあめなのか。俺は道の端の石段に座って、あいねも隣に座った。「いただきます」焼きとうもろこしを食べた。うまい。「おいしい」あいねが小さな声で言った。食べ物にはあまり興味がなさそうだと思っていたが、違っのか。

「あいね、自炊してるの?」

あいねが頷く。どうも俺の中ではサプリメントとゼリー飲料で生きているイメージがあった。

「博多の塩がおいしくて好き」

なぜ調味料なのか。

「いつから一人暮らししてるの?」

「中三の終わりから」

「何で一人暮らししてるの? 大変じゃない?」

言うてから、そういえば孤児だという話を思い出した。自分の記憶力のなさに失望した。

「あの、言いたくなければ、いいから」

「別に。前にも言ったけど、私自身は気にしてないから」

あいねはとてもクールだ。俺には生まれてこの方ずっと両親がいるので、気持ち想像できない。

「両親とあまり仲がよくなって。零音の家は、みんな仲良しなのね」  
俺はうなつて、頷いた。気にしていないとしても、雰囲気からしてやっぱり聞くべきではなかった。せつかく二人きりなのだから、もっと楽しい話をしよう。俺は心の中で深く反省した。

焼きとうもろこしを食べ終わって、屋台を冷やかしていると、あいねが俺の腕を叩いた。

「零音、わたあめ買ってくる」

あいねはわたあめの屋台を指差して、屋台の方へ向かっていった。俺は慌てて追いかけた。変質者、もとい変な動物に襲われたら大変だ。

「二つください」

「お姉さん可愛いね。後で遊ばない？」

わたあめ売りの青年が言った。

「遊びません」

あいねは無表情で青年を一刀両断した。ちょっと青年が可哀想になつた。

「冷たいな。あ、彼氏？」

青年は笑顔で隣にいた俺を指差した。あいねは若干、眉をひそめた。

「違います」

俺も斬られた。少し悲しくなつた。

あいねはわたあめを二つ受け取って、道の端へ歩いていく。あいねが石段に座って、俺は少し間を開けて隣に座る。あいねから差し出されたわたあめを受け取った。

「甘いもの好きなの？」

あいねは頷く。わたあめを食べながら、右足の方へかがみこんだ。「どうしたの？」

「靴擦れしたみたい」

俺は手を打って、懐から絆創膏を取り出す。「はい」あいねに渡

すと、あいねは目を丸くして、絆創膏を受け取った。

「ありがとう。いつも持つてるの？」

「いや、今日は何となく」

心の中でミリアに頭を下げた。さすがミリアだ、やはりしっかりしている。

「持つてもらっていい？」

あいねのわたあめを受け取る。あいねは絆創膏をはがして、右足の方へかがみこんだ。先程、ジークが浴衣のうなじについて力説していたが、なるほどこういうことかと思った。あいねのうなじは白くて、何というか、綺麗だった。普段髪を下ろしているので尚更だ。顔を上げたあいねと目が合った。あいねは手を伸ばして、俺の手からわたあめを受け取る。

火薬の弾ける音がして、空に花火が上がった。歓声がおこる。「もうそんな時間か」確か花火は七時からだったはずだ。あいねは花火を見上げていた。あいねを呼ぶと、あいねはこちらを向く。

隕石が落下したような音がして、地面が縦に揺れた。つい最近、同じような体験をしたことがある。すごく嫌な感じがする。揺れが収まると、あいねはもう立ち上がっていて、空を睨んでいた。

視線の先には、神社の御神木より巨大な、キリンがいた。キリンの横で、花火が上がった。頭が痛くなつた。あいねが走り出して、俺もあいねを追いかけて走った。

「何で来るの」

あいねは俺を振り返りながら怒鳴った。さっきまでの大人しさが嘘のようだ。

「じつとしてられないんだよ」

あいねのエメラルドの瞳が細くなる。

「巻き込まれて死んでも知らないから」

あいねの冷たさにひるんだ。けれど、あいねを一人で行かせたくない。「望むところだ」俺は叫んだ。

祭囃子が流れていたスピーカーから、どこかで聞いたことのある

曲がフェードインしてきた。つい最近、同じような体験をしたことがある。嫌な予感がした。あいねは走りながら、忌々しげな表情でスピーカーを見上げた。キリンはもう目の前だ。キリンは雑木林を倒しながらキリンとは思えないスピードでこちらへ走り出した。

『スイル』

あいねが、宙に浮いた。俺はキリンの進路から横に曲がった。

『緑の地 自 土 風 水 気 露の香り浴びて甘く』

あいねはキリンの首の高さまで飛んだまま、キリンに手を向ける。あいねを通り越していったキリンが、振り返って進路を変えた。キリンは蛇のように口を開いて、鳴いた。

『学園防衛隊GBT参上』

スピーカーから声が聞こえた。奴等の姿は見えない。俺にできることは、せめて奴等があいねの邪魔をしないように、気絶させておくことだ。「スイハンジャーだ」子供が叫んだ。向こうの屋台の方で、ブラックとホワイトが子供達に囲まれていた。「レッドは？ レッドいないの？」「ピンクは？ ピンクいないの？」「ブラックが子供の頭を撫でた。

「まあ待て。私はあのキリンを倒さなければいけない。サインはそれからだ」

衣装にマイクがしこまれているのか、スピーカーからブラックの声が音割れして聞こえた。お母さん達が黄色い歓声を上げる。テレビとまったく声が違うが、いいのか？ ブラックとホワイトが子供達の波をかき分けてこちらに来る。俺に気付いたのか、ブラックは立ち止まった。

「レッド、子供達は任せる」

この前はブルーって言ってなかったか？ ふと真面目に考えてしまった自分に失望した。

「ここから先は行かせない」

「なぜだ」

「とりあえずマイクをオフにしる。筒抜けだから」

ブラックは衣装の胸元をいじった後、発声した。マイクは切れたようだ。

「で、なぜだ」

「零音、避けて」

どこからかあいねの声が聞こえた。何かきしむ音に振り返ると、木が俺の方へ倒れてきている。俺は横に走った。木は根元から、今しがた俺がいた地面に倒れた。心臓が口から出そうだ。

見上げると、キリンが緑の蔦に絡まれてもがいていた。「日立あいね?」ブラックもキリンの方を見上げていた。あまり知られられなかったが、仕方ない。

「という訳であいねの邪魔になるから、行かせない」

「何がという訳でだ。なぜ日立あいねが宙に浮いているのか説明しろ」

「イリユージョンだよ」

「レオン、ふざけるな」

「その格好のお前にだけは言われたくない」

『黒の空 星 宙 塵 光 年月裂きて道筋露わに』

あいねがキリンに手を向けると、キリンの口が裂けた。キリンの舌がカメレオンのように伸びて、あいねに巻きつく。「あいね」「えろいな」ブラックが呟いた。俺はブラックを蹴り倒した。

「どきなさい」

ホワイトが肩にロケットランチャーを担いでいた。

「本当にいてもいなくても一緒なんだから」

ホワイトは呟いた。俺とブラックに言ったのかもしれないが、少なくともブラックはいた方が害になると思う。ホワイトはライターを取り出して、ロケットランチャーの口に火をつけた。ロケットランチャーから炎が噴き出す。噴き出した炎は、キリンの足と、周りの木に燃え移った。

「待て、燃えてるって、火事火事」

俺は叫んだ。

「簡易火炎放射器よ。よい子は真似してはいけないわ」

「真似したくてもできないって馬鹿」

キリンが暴れ出した。ゆるんだ舌の隙間から、あいねが手を出す。  
『マヴェエオ』

キリンの舌が根元から切れて、金切り声が聞こえた。俺は耳を塞ぐ。切れた舌が地面に落ちてきた。前回から思っていたが、ゾウといい、キリンといい、何でこんなにグロテスクなのか。

『命ずる 原子を読み知とする 知を組み成型する』

あいねはキリンに手を向ける。キリンは頭を振って、あいねを叩き落そうとする。

『知と原子は等しくあれ』

あいねの手から白黒の光が迸る。

『放て デルデイウス』

白黒の光がキリンを包んで、火花を散らす。キリンの頭突きがあいねを叩き落した。「あいね」俺は走った。キリンが金切り声を上げる。キリンの角が、崩れた。頭から、砂になって崩れていく。ゾウの時と同じだ。

あいねは折れた木の枝と一緒に地面に倒れていた。「あいね」俺は駆け寄ってあいねの肩を叩いた。目を開けない。救急車？ でも色々聞かれると面倒だ。あいねの口元に手をかざす。息は、している。

「落ち着け」

浴衣姿のハインがこちらへ歩いてきた。ハインはあいねの側にしやがみこんで、あいねの口元に頬を近付ける。そのままあいねの首をとって、指をあてた。

「気絶しているだけだ、おそらく。念のため病院に行った方がいいが、騒ぎが収まってからだ。一旦うちに運んでやれ。盟、野次馬を頼む」

ホワイト、もとい盟は返事をして屋台の方へ向かっていった。俺はあいねを抱きかかえた。ハインが笑った。

「お似合いだな」

首が熱くなつた。その時初めて、ハインがいつの間にか着替えていたことに気付いた。

パトカーのサイレンが近付いてくるのが聞えた。俺はあいねを抱えて、雑木林を歩き出した。

ハイン、あいねと一緒に家に帰ると、玄関にミリアとジークが出てきた。

「大丈夫だった？ 急に、キリンが」  
ミリア達もあのキリンを見たのか。

「俺は大丈夫だけど、あいねが具合悪くなったみたいだから、落ち着くまで休ませるよ」

俺は目を閉じたままのあいねを見た。

「ねえレオン、あのキリンって、この前のゾウと関係あるのかしら」  
「ミリア、今はいいだろう。とりあえず日立あいねを休ませてやれ」  
ハインが言った。

「そうね。ごめんなさい。付き添うわ」

「レオン、終わったら俺の部屋に來い」

ハインは玄関から階段を上がっていった。

「じゃあ俺は帰るよ。日立さんにお大事になって伝えておいて」  
ジークが言った。

「すまないな。じゃあ、また学校で」

俺は玄関を出ていくジークを見送った。

ミリアにあいねの付き添いを頼んで、俺はハインの部屋のドアをノックした。返事があったので、部屋に入った。

ハインの部屋は、何というか、城で黒い。家具は世界史の教科書で見たようなロココ調で、黒い。壁も黒い。絨毯も黒い。天井のシヤンデリアと家具の金具だけが金色だ。魔王の部屋があったらこんな感じだと思う。

「座れ」

ハインに椅子を勧められた。部屋は十畳くらいなのに、なぜか部屋の真ん中に丸テーブルと椅子が二脚ある。椅子に座ると、ハインが向かいに座った。ハインは腕を組んで、脚も組んだ。

「日立あいねについて知っていることを全部話せ」

シャンデリアの薄暗い光がハインの顔に影を作っている。どうやら本気のようなのだ。

「プライベートなことだから、聞きたいならあいねに直接聞いてくれ」

ハインは俺を見ている。というか、睨んでいる。何も言わない。ハインは立ち上がって、向こうの机の引き出しから何か取り出してきた。はがき大の紙をテーブルの上に置く。

そこには、多分風呂上がりの、上半身裸の俺が写って、いた。写真をつかみ取るうとする。ハインの方が速く、写真を取り上げる。

「言わないと明日からレオンのぎりぎり写真を五枚一組千円で販売する」

とっさのことで声が出ない。というか、何を言えいいのか分からない。

「ちなみに売れるのかという心配は無用だ。お前は人気者だからファンクラブもあるし」

知らなかった。本人が知らないファンクラブってどうなんだ。

「さあ、どうするレオン。俺はどちらでもいいが」

ハインが薄く笑って、俺を見下ろしている。魔王がいたら、多分こんな感じだと思う。

「分かった」

俺は立ち上がった。

「言う。訳ないだろ馬鹿が」

俺は叫んでハインにつかみかかる。避けられた。

「まずはそれを燃やすから渡せ。というかいつ撮ったんだ変態」

「燃やしてもいいが、元データは沖縄のデータセンターにバックアップ済だぞ」

「地獄に墮ちる」

「力で俺に敵うと思ってるのか？」

ハインは笑う。突き飛ばされて、床に頭を打ち付けた。ドアをノックする音が聞こえて、ドアが開いた。

ミリアと、その後ろにあいねが立っていた。一瞬、空気が凍ったような気がした。あいねと目が合って、すぐにそらされた。よく見ると、俺はハインに、押し倒されて、いた。一瞬で血の気が引いた。「あんた達そういう関係だっけ？」

ミリアは真顔だった。俺は力の限り首を横に振った。

「レオンが大人しくしないからだ」

「誤解をまねく言い方するな」

俺は叫んだ。

「別に、俺は構わないが？」

ハインは笑って、俺のあごをつかんだ。背中から全身に鳥肌が立った。ハインは手を離れた。

「冗談だ。男に興味はない」

ハインは俺の上からどいて、椅子に座った。俺は起き上がった。

微妙に崩れてしまった浴衣の前を直した。鳥肌が治まらない。

「で、何の用だ」

ハインはミリアとあいねの方を向く。

「あいねが起きたから知らせに来ただけよ」

俺はようやく正常な思考を取り戻して、あいねに駆け寄った。

「大丈夫？ 怪我とか」

「大丈夫」

あいねはミリアのパジャマを来ていた。何だか目のやり場に困ったが、その前に目を合わせてもらえない。ハインのせいだ。

「丁度いい。日立あいね、聞きたいことがある。ミリア、席を外してくれないか」

ミリアはハインを見て、腰に手を当てた。

「分かったわ。じゃあ、あいね、気分悪くなったら無理せず降りて

くるのよ」

ミリアはあいねの肩を叩いて、ドアの向こうへ消えた。

ハインは立ち上がった。部屋の奥のベッドに腰かけた。「座れ」  
あいねに向かつて、先程座っていた椅子を指す。あいねは硬い動き  
で椅子に座って、俺もあいねの向かいに座った。

「まず、初めまして、か？ 松田波韻だ。レオンの兄で、生徒会長  
をやっている」

「知ってます」

「そうか。なら話は早い。質問に答えてくれ。お前は何者だ？」

「いきなりその聞き方はどうかと思うぞ」

「じゃあまず、飛べるのか？」

ハインの視線はあいねに注がれている。あいねはハインを見てい  
ない。

「お前もレオンと同じでだんまりか」

ハインは立ち上がった。向こうの机の引き出しから何か取り出し  
てくる。嫌な予感がした。ハインははがき大の紙を丸テーブルの上  
に置いた。そこには、スクール水着姿のあいねが写って、いた。

「言わなければ明日からお前のセクシー写真を五枚一組千五百円で  
販売す」

『オスタ』

ハインは言い終わる前に、あいねの手から放たれた水流に飲みこ  
まれて、部屋の向こうまで吹っ飛ばされた。あいねの周りに黒いオ  
ーラが見える。少し欲しいと思っただけと絶対には言えない。

「今、何をした。日立あいね」

ハインが戻ってくる。あいねは写真をシュレッダー顔負けの細か  
さに破いていた。

「ハイン、盗撮は犯罪だぞ」

「お前も欲しかったんだろ？ にやけてるぞレオン」

あいねが夏の怨霊のようにこちらを見る。まずい、墓穴を掘った。  
死ぬかもしれない。

「今、どうやって俺を向こうまで飛ばした？」

あいねはハインを見る。エメラルドの瞳は、細い。

「どうして兄弟揃って面倒事に巻きこまれようとするの？」

「俺は学園の平和を守るため、レオンはお前が好きだからだ」

否定の言葉を叫びかけたが、あいねの方が速い。

「冗談は聞いてない」

言葉が深く突き刺さった。

「別に冗談じゃない。現にGBTに怪文書も届いている」

ハインは懐から三つ折りのコピー用紙を取り出して、あいねに渡す。あいねはコピー用紙を開いた。『日立あいねに近付くな。さもなければ災いがおこる』例の文章だ。

「近付くなって書いてあるけど」

あいねが冷たい目で俺とハインを見る。俺は口ごもった。

「俺は近付くなと言ったのに、レオンが近付くからだ」

「何にせよ、あなた達に話すメリットが何もない」

「好きな人のことだったら知りたいと思うぞ。レオンは」

「だから冗談は聞いてない」

あいねは容赦がない。言葉が胸をえぐっていく。

「聞きたいならレオンに聞いて。私から話すことは何もない」

ハインは目を細くした。

「分かった。じゃあ最後に関係ないことを一つ聞こう」

ハインは座っているあいねの前へ立った。

「胸はいくつだ？ 70のEくらいか？」

空気が凍結したような気がした。部屋の温度が下がっていく。

『ヤコア』

あいねの手から放たれたひょうが、ハインを向こうへ吹っ飛ばしていった。あいねは立ち上がって、ドアの前で、俺を振り返る。エメラルドの瞳は、とても冷たかった。

「男の人が好きだって、知らなかった」

頭が真っ白になった。あいねは部屋を出て行く。

「違う」

俺は既に閉まってしまったドアに向かって、叫んだ。

俺はため息をついた。ついてから、ため息は幸せが逃げるからやめようと思った。黒いファイルをめくる。もう放課後だから、時間を気にする必要もない。

「レオン、さつきからうるさいぞ」

ハインはお誕生日席のいい椅子に座って、DVDを観ていた。盟も隣で観ていて、例のごとくテレビから目を離さない。

「誰のせいだと思ってるんだ馬鹿」

俺は叫んだ。

「何の話だ。冷蔵庫のプリンはお前のだったのか？」

「ミリアに殴られて死んでこい」

俺は机につつぷした。あれからあいねとは一度も話していない。本当に誤解されているのか何なのか、避けられている気がする。もし本当に誤解しているのなら、非常にまずい。俺はため息をついた。短い電子音が聞えた。顔を上げると、盟がデジカメをこちらに向けていた。

「いや、待て待て待て」

俺は歩いていって、盟のデジカメをつかんだ。盟はあっさりデジカメを離す。保存されている写真を見ようとすると、黒い画面に白文字が表示された。『パスワードを入力してください』

「いや、普通デジカメにこんな機能ついてないよな？」

「OSを改造したのよ」

それは違法じゃないのか？ 大丈夫か？

「そういえばレオンのぎりぎり写真は今日から販売だが、買うか？」

「買うか馬鹿。というか売るな」

俺は叫んだ。

「日立あいねの秘密を言えばやめてやる。ちなみに売れ行きは上々だ」

警察に訴えたら罰金くらいは取れるだろうか。警察もそんなに暇じゃないから無理か。でも、あいねの写真が売られるより、俺が犠牲になった方がいい。

俺は諦めてファイル調査に戻った。もう生徒は見終わってしまったので、教師のページに入っている。

ページをめくると、担任の写真が載っていた。『祭司』と書いて『まつりつかさ』だ。入学式の時、珍しかったのですぐに覚えてしまった。生年月日を見ると、やはりハインと同じ年だった。身長・178cm、体重・59kg、好きな人・同期で元同級生の橋元。誰だ橋元つて。趣味・動物園巡り、特記事項・上野動物園年間パスポート所持。

俺の中で、何かが引つかかった。まさか、まさかとは思うが、襲撃してくるのはなぜかいつも巨大な動物だ。コピー用紙の怪文書も、そっぴいえばあいねの転入初日、机にコピー用紙を貼っていなかったか。コピー用紙と動物園の情報で担任を疑うのもどうかと思うが、何となく、怪しい。

「なあハイン、監視するなら俺じゃなくて、担任にしてくれないか」  
ハインはテレビを覗いている。テレビから本物のブラックの叫び声が聞えた。話しかけても無駄かもしれない。

「担任つて、お前の担任か？」

相変わらずテレビから目を離さないが、返事があった。「そう」  
俺は頷いた。

「なぜだ」

「犯人な気がするから」

返事がなくなった。もう頼るまい、期待するまい。エンディングテーマが流れてくると、ハインは立ち上がった。俺の方まで来て、ファイルをひったくる。

「ああ、司か」

「何で親しげなんだ」

「同級生だからだ」

一瞬、理解できなかった。

「同じ学校に入学して、担任は卒業して母校の教師になったけど、ハインは卒業してないってことでいいか？」

「卒業しないだけだ」

同級生に授業を教わるというのはどんな気分なのだろう。でも担任の担当は英語なので、教わらなくてもよさそうだ。

「証拠はあるのか？」

ハインはファイルを机に置いた。重い音がした。

「動物園好きっていうのと、怪文書がコピー用紙だっていうことくらいだけ」

「ちなみにコピー用紙から指紋は検出されなかった。計画的な犯行だ」

「検出つて、誰に頼んだんだ、誰に」

「秘密だ」

ハインはファイルに視線を落とした。

「司、か。まあ監視のことは考えておく。ところでレオン、お前のクラスの出し物はメイド&執事喫茶になったらいいな」

昨日、ミリアがホームルームで言っていた。メイドだけだと不公平なので、執事も入れるということになったらしい。学年の飲食店枠はあみだくじで無事確保することができた。

「お前はメイドと執事、どっちだ？」

「いや、俺は作る方でいいです」

「作る方には入れないように俺が手を打っておく」

「何様だお前は」

ハインは薄く笑った。

「メイドと執事、どっちに転んでも高く売れそうだな」

テンションが一気に下降した。どうして俺はこいつと血が繋がっているのだろう。

「ちなみに写真の売り上げは全額ユニセフに寄付している。私利私欲のためにやっている訳ではない」

「何でそこだけ偽善的なんだ」

「日立あいねはメイドと執事どっちだ？」

「あいねの写真は売るな。俺が犠牲になるから」

ハインは俺を見て、笑い出した。

「青春だな。まあ、好きになるのはいいことだ」

ハインはお誕生日席の方へ歩いていって、鞆から白い冊子を取って戻ってきた。

「言い忘れてたが、今年もGBTで劇をやるからな。当日までに読んでおけ」

俺は冊子の表紙を見た。黒文字で『白雪王子』と書いてある。

「いや、白雪王子って何だ。そもそも初耳だし」

「白雪姫の性別逆バージョンだ」

俺は白い冊子のページをめくった。配役が書いてある。白雪王子・俺、魔王・ハイン、姫・未定、小人・ジーク、他・未定。俺は冊子を閉じた。

「いやいやいや、未定多すぎるし、後二週間しかないし」

「大丈夫だ。後夜祭用だし、ほぼファンサービスだからな。一心台

本はあるが、全部アドリブで構わない」

「いや、構えよ。駄目だろ」

「姫役には日立あいねを誘っておけ。キスできるぞ。される側だが」  
俺は白い冊子、もとい台本をめくった。

『昔々、ある所に世界で一番美しい青年、白雪王子がいました。王子は毎日平和に暮らしていましたが、王子の美貌をねたむ義父（魔王）が城にやってきてからというもの、嫌がらせを受け、うつ病一歩手前まで追いこまれてしまいました。主治医の診断で小人がいる別荘へ一時避難することになった白雪王子でしたが、何だか毎日物が足りません。義父から逃げてきたのに、義父に会いたい。白雪王子はやっと自分の気持ちに気付きました。』

そんな折、変装した義父が白雪王子を亡き者にしようと毒林檎を持ってやってきます。白雪王子は義父の変装に気付き、想いを告白

します。しかし義父は同性に興味がなかったので、白雪王子は振られてしまいます。悲しみのあまり毒林檎で自殺を図った白雪王子でしたが、通りかかった姫に心臓マツサージと人工呼吸を施され、一命を取り留めます。失恋のショックから立ち直れない白雪王子を、姫は励ましました。姫の介助によって明るさを取り戻していった白雪王子は、新しい恋を見つけようと星に誓ったのでした。めでたしめでたし』

俺は、台本を閉じて、机につぶした。もう何も言えない。

「割と現代社会の問題を反映していると思うんだが」

ハインは言った。

「とりあえず海に飛び込んでくるといいと思うぞ」

「主役なのに不満なのか」

俺は顔を上げた。

「というか、本当に、本当にお前、男が好きなのか？」

「アンケートで要望が多かったただけだ。男で、しかも兄弟に興味はない。ミリアの方がまだましだ」

「じゃあミリアを王子にしろよ」

「それじゃアンケートの意味がないだろう」

この学校にはそんなにその属性の生徒が多かったのか？ 世も末だと思った。

「姫役には日立あいねを誘っておけ」

ハインは台本を取って、配役のページの姫の欄にボールペンで『日立あいね』と書いた。

「世界がひっくり返っても無理だと思うぞ。というかお前のせいで避けられてるのに」

俺は机につぶした。

「本気で好きならそれくらい乗りこえる」

「他人事だと思いやがって」

「他人だからな」

ハインは笑いながらお誕生日席に戻っていった。

あいねは今どうしているのだろうか。また変な動物に襲われていないだろうか。

ふと、違和感を感じた。キリンに襲われた次の日、ニュースで社の火事は報道されたが、キリンのことは何も言っていなかった。学校でも、誰もキリンのことを話題にしなかった。明らかに、おかしい。けれどそれ以上におかしいのは、今の今までそのことに疑問を感じていなかった俺自身だ。疲れているのか？ それとも、犯人が何かしているのか？

テレビからスイハンジャーのオープニング曲が流れていた。俺は開きっぱなしの黒いファイルを見る。写真欄には、担任の証明写真が貼られていた。

「はい、できた」

俺は鏡を渡される。鏡を置いて、静かに机につつぷした。

「何で落ちこんでるのよ。かなり可愛い方だと思うわよ？」

「いや、そうじゃなくて」

「松田君、下手な女の子より可愛いよ」

「うん、綺麗綺麗」

まわりで見ていた女の子達が語気を荒くしていた。

とうとう待ちに待った文化祭の日がやってきた訳だが、俺はハイソンの圧力により本当に接客へ回されてしまった。

「午後には男の子に戻るから、頑張りなさい」

ミリアは笑いながら俺の肩を叩いた。午前が接客、午後が自由時間だ。例年、文化祭は二日間行われるのだが、最近の動物騒ぎのせいで今年は一日に縮まった。おかげでメイドの格好だけで文化祭が終わるといふ不名誉な記録が残ることになってしまった。

向こうの方で、女の子達の歓声が上がった。

「似合う？ 似合う？」

ジークが楽しそうに回っていた。ロングスカートがひるがえる。

俺もジークもロング半袖の黒いメイド服だ。さすがに脚を出すと見

苦しいので、出さない。ただし腕の毛は剃られた。ジークが俺の方へやってくる。

「レオン可愛いじゃん」

ジークは茶髪の二つ結びのウィッグをしていた。ツインテールというらしい。かくいう俺も黒のゆるくウェーブのかかったロングのウィッグをしている。

短い電子音がして振り向くと、ミリアを含む女の子達が携帯を俺達へ向けて構えていた。

「二人共でかいけどね」

ミリアが言った。確かに俺もジークも180cmを超えている。

「レオン、胸ずれてる」

ジークが俺の左胸、もとい偽胸をわしづかみにする。女の子達から悲鳴とも歓声とも似つかない声上がる。ミリアのこだわりで、服の内側に丸めたタオルをつめこまれ、胸もどきを作らされたのだ。女装した男に偽胸をつかまれている俺は、何なのだろう。

短い電子音がした。女の子達に紛れて、盟がいた。俺は再び机につっぱした。

「邪魔するよ」

教室のドアが開く音と、聞き覚えのある声がする。盟とミリアを除く女の子達が叫ぶ。

「波韻先輩」「波韻様」「本物、本物だよ」

様付けされている。恐ろしい。俺は顔を上げた。

「波韻先輩、今年は軍服なんですか？」

本当に軍服を着たハインがいた。長袖だ。暑いのに。

「去年は乗馬服でしたよね」

「一年生なのに何で知ってるんだ？」

ハインは女の子を見る。営業用スマイルだ。

「違うんです、あの、あたし、学校見学に来てて、波韻先輩を見て、こんな格好いい人いるんだって、決してストーカーとかではなく」  
「そんなに力いっぱい説明しなくても。俺は心の中でつつこんだ。」

まあ、彼女の中に何かやましいことがあるのかもしれない。

「そうか。来年も楽しみにしていてくれ」

「どうやら、ハインは今年も卒業しないらしい。」

「はい。あたしもう死んでもいい」

「ちよつと、死ぬ前に今の波韻様スマイルをあたしに全部渡してから死んで」

女の子達が言い争い始めた。ハインと目が合った。ハインは、笑い出した。

「レオン、似合うな」

俺はとても屈辱的な気持ちになった。

「東京湾へ沈んでこい」

「そっちは藤崎か？」

ハインはジークへ目を向ける。

「俺達、結構いい線いってると思うんだけど」

ジークはその場で一回転してみせる。さっきから疑問だったのだが、なぜジークは本当に楽しそうなのだろうか。

「いや、二人共似合ってるぞ」

「というか何しに来たんだ。用がないなら帰れ」

「お前を見に来たに決まってるだろう」

ハインにあごをつかまれた。反射的に鳥肌が立った。女の子達が叫ぶ。

「お前、もうそのキャラやめろ。誤解されるぞ」

俺は叫んだ。

「ファンサービスだ」

「どこのファンにだよ」

ドアが開く音がした。

「美里亜、いる？」

開いたドアのところ、メイド服姿のあいねが立っていた。白いカチューシャに胸元が開いた黒いミニのワンピース、白いエプロン、黒い膝上の靴下をはいている。特筆すべきは、ガーターベルトだろ

う。こう、ぐつとくるものがある。男の夢を形にしたらこんな感じ  
かもしれない。とても、可愛い。

「零音？」

あいねが冷たい目でこちらを見た。よくよく見ると、俺は、ハイ  
ンにあごをつかまれたままだった。体が固まった。

「日立さん可愛いね」

ジークが笑顔であいねに駆け寄っていく。

「藤崎君？」「似合う似合う？」

ジークはあいねの前で一回転する。盟があいねにカメラを構える  
と、あいねは冷たい目をして手を差し出す。「一枚五千元」盟は舌  
打ちした。

「可愛いな。日立あいね」

ハインは俺から離れてあいねに近付いていく。ようやく呪縛が解  
けた。

「それはどうも」

あいねはとても棒読みで言った。

「ガーターベルトは男の浪漫だな」

考えていることがハインと一緒にだった。俺は軽いショックを受け  
た。

「変態なの？」

あいねの目はとても冷たかった。

「波韻先輩、明日からあたしもガーターベルトにニーソックスで来  
ます」女の子が叫んだ。「ちょっと、それならあたしも」何だこの  
カリスマは。

「美里亜、先生が呼んでる」

あいねは言った。ミリアは返事をして、教室を出ていく。あいね  
は冷たい目で俺を見て、ドアを閉めた。

「1-Cメイド&執事喫茶、来てね。三階だよ」

ジークがすれ違う女の子達に向けて手を振る。お客が来ないので、

なぜか俺はジークと一緒に看板を持って校内を練り歩いている。恥の上塗りもいい所だ。

「で、何だっけ」

「いや、だから、あいねに俺とハインの関係を誤解されて、さつきも更に誤解されたというか、事実はないのに何で誤解されるんだというか」

「誤解と事実は関係ないから誤解って言うんだよ」

もっともなことを言われてしまった。

「どうやったらかこの疑惑が晴れるんだ」

「ちゅーすれば？ あ、日立さんにね。会長にじゃなくて」

最低でもつつこみたい所が二箇所以上あるが、どうしよう。

「大事なステップを飛びこえてると思うぞ」

「別に告白しなきゃちゅーしちゃいけないなんて法律はないんだから、いいじゃん、しちゃえば」

ジークは、携帯を構えた女の子達の前でポーズをとっていた。言っていることとやっていることがばらばらだ。

「好きなんだろ？」

ジークは俺を振り返る。俺は、答えられない。ジークが笑って俺の肩を叩いた。

「素直でいいじゃん。後夜祭の時にも日立さん誘って言えよ」

多分、顔が赤い。恥ずかしい。

「お前はそういうのなの？」

「何が？」

ジークは女の子達に手を振った。

「その、好きな人とか」

女の子同士の恋愛話のようだと思って、また恥ずかしくなった。  
「いるよ」

ジークは儂げに笑った。そんな顔をするのが意外だった。

「学校の人？」

「学校の人ではない」

ジークは口に人差し指を当てた。

「これ以上は教えない。さあ、客引き客引き」

ジークは歩き出した。あまり触れてはいけなかっただろうかと思っ  
つて、少し反省した。

午前の仕事が終わって教室に戻ってくると、ミリアが俺の方へや  
つて来た。

「レオン、あいね見なかった？」

「見てないけど。いなくなったの？」

「朝はいたんだけど、いなくて。ちよつと探してきてくれる？」

俺は返事をして教室を出た。うっかり引き受けたのはいいが、探  
すといつても校内は広い。どうしよう。

とりあえず俺は歩き出して、人の波を目で探す。でも、あいねが  
仕事をさぼるなんて考えにくい。もしかしてどこかで変な輩に捕ま  
っているのだろうか。一瞬、ハインの顔が浮かんだが、あいつは営  
業妨害まではしないだろう。誰もあいねを見ていないということは、  
誰も行かないような場所かもしれない。俺は別塔の方へ向かった。

別塔へ繋がる二階の渡り廊下には、関係者以外立入禁止のロープ  
が張られていた。ロープをまたいだら、スカートが引っかかった。  
スカートはこういう時に邪魔なんだなと思った。

「松田、さぼりか？」

聞き覚えのある声に、振り返る。

「祭先生」

「気持ち悪いな。お前に名前呼ばれたの初めてだぞ」  
ワイシャツにスラックス姿の担任が立っていた。

「で、さぼりか？ さぼるなら俺の許可を取ってからにしろ」

「いや、さぼりじゃなくて日立さんを探してるんです」

言ってから、心の中で舌打ちした。祭まつり司つかさ、この間ファイルで目  
をつけたばかりではないか。正直に言うべきではなかったかもしれ

ない。

「日立はここには来てないぞ」

「何で分かるんですか」

「ずっとここにいたからだ」

「何でずっとここにいたんですか？」

「不審者が別塔に行かないように、教師が交代で見張ることになっている」

「でも今、いなかったじゃないですか」

「トイレだ」

「じゃあ念のため探してきます。今みたいに、先生がいない間に来た可能性もあるんで」

俺は走り出そうとした。あまり長く関わっていたくない。

「松田」

振り返る。そこに担任の姿はなく、俺は後ろから羽交い絞めにされ、みぞおちに激痛を感じた。

「余計な詮索は身を滅ぼすぞ」

担任の声が、聞こえた。

気が付いて腕時計を見ようと思ったら、手が動かなかった。目の前にはプールがあり、俺はプールサイドにいた。隣に、メイド服姿のあいねがいた。

「あいね」

叫ぶと、あいねは面倒そうに俺を見た。「おはよう」動こうと思ったら、両足を合わせて何かで縛られていた。スカートに隠れていて見えない。あいねを見ると、後ろで手と、足を虎の子ロープで縛られていた。呆然とした。プールの水面が光って、綺麗だった。

「落ち着いた？」

あいねが言った。

「いや、あんまり。というか、何で落ち着いてるんだよ」

「だって動けないから」

「魔法で何とかならないのか？」

「ロープが魔法封じだから、無理」

ただの虎の子ロープだと思っていたらそんな効果があるなんて。俺は壁に背を押し付けて立ち上がった。両足跳びで校舎につながるドアの前まで来て、後ろ手でノブを回して、押してみた。悲しい金属音がした。もう一つのドアも調べてみたが、鍵がかかっている。俺はあいねの隣まで戻った。

「誰に捕まったの？」

あいねが言った。「担任」「何で？」「あいねを探してたから  
あいねは黙って、俺から目をそらした。」

「あいねも担任に捕まったの？」

あいねは頷いた。やはりあいつが犯人だったのか。

「そういえば、助けてくれてありがとう」

あいねはこちらを向く。俺は首をかしげる。

「いつ？」「お祭りの後」「ああ」

俺は思い出して、顔を伏せた。

「あの、ハインとは別に本当に何でもなくて、兄弟だし、男だし  
顔を上げる。あいねが俺を見ている。」

「零音は男の人と女の人どっちでもいいのかと思ってた」

「違う、無理だから。男は無理」

「お兄さんはそっち系の人なの？」

自信を持って否定できない。男は嫌いだとは言っていたが、何だ  
かあいつは誰でもよさそうだ。

「いやでも男は嫌いだって言ってた。というか俺とは何もないから。  
信じてくれ。俺は潔白だ」

面会室で無実を訴える囚人のようだ。どうしてこんなに力いっぱ  
い主張しなければいけなくなったんだ？

抑えた笑い声が聞えた。あいねが声を殺して笑っていた。笑った  
所を初めて見たような気がする。

「分かった。信じる」

あいねの声は笑って震えていた。  
ドアが開く音がした。

「松田が男好きとは知らなかったな」

九月の暑い逆光に、担任の姿が照らされていた。つつこみたい所  
が少なくとも二箇所以上あるが、どうしよう。

「あいねを狙ったのはあんただだったんだな」

「男好きにはつつこまないんだな」

指摘された。余計なお世話だ。

「あいねの誤解が解ければいい」

「松田は日立が好き、という訳か」

どうして本人を目の前にしてそういうことを言ってしまうのか。  
やめてほしい。

「今それは関係ないだろ。それより、犯人はあんたなんだな？ G  
BTに怪文書を送りつけたのも、動物を使ってあいねを襲ったのも、  
全部あんたの仕業か」

担任は俺の前へ立つ。

「お前と日立がどんな関係かは大いに重要だ。それによってはお前  
だけ解放してやらないこともない」

担任はあいねの前へ歩いていく。担任を見上げるあいねの目は、  
細い。

「日立、松田はお前の何だ」

「他人です。ただ私を探しにきただけ」

本心なのか、俺を巻きこまないように言ってくれているのか、分  
かりかねる。

「他人にしては祭りの時に仲がよかったみたいだが？」

見られていたのか？ 意外と陰湿だ。

「あなたが何と思うと、他人は他人」

本心なのだろうか。本心だったら若干傷付く。

担任は冷たい目であいねを見て、あいねの髪をつかんで引き上げ  
た。「おい」俺は立ち上がるうと壁に背を押し付ける。

「正直に話せば松田は解放してやろうと思ったが、あくまでしらを切る訳だな。まあいい。二人共死ね」

一瞬、聞き間違えたかと思った。この男は、本気で俺達を殺す気なのか。

あいねが、笑った。

「どうぞ。できるものならね」

電気コードが断線した時のような音が聞こえた。

『ニーロ』

あいねは担任の目の前に炎をまいた。担任が飛びのく。

『ワプラ』

あいねは脚を縛っているロープに電気を走らせた。ロープが焦げて、切れた。

「零音は逃げて」

言いたいことが少なくとも二つ以上あるが、どうしよう。

「あいねを置いていけない。というかこの状態で逃げられない」

手はまあいいとして、脚を縛られているのがきつい。両足跳びで逃げるのか？

『透の空気 火 塵 以て我が手に立ち昇れ ニーロ』

担任の手から、俺へ向けて炎が放たれる。あいねが舌打ちして俺に駆け寄ってくる。

『オスタ』

あいねの放った水で、炎は消えた。

「他人を守るのも大変だな。アイネ・リルン」

「独断なの？ 誰かの命令なの？」

「答える訳ないだろう」

『ワプラ』

あいねは俺の手足のロープを焼ききった。

「逃げて。言っても無駄かもしれないけど」

「逃げない」

「死んでも知らないから」

あいねは呟いた。怒ってはいなかった。

『透の空中 風 塵 以て我が手に巻き起これ アリス』

担任から、風が吹き出す。俺は目を閉じる。羽交い絞めにされ、首に触れられる。風がやむと、俺は担任に後ろから押さえつけられ、首をつかまれていた。あいねが険しい表情でこちらを見ている。

「他人がどうなるうと、お前には関係ないだろう？ アイネ・リルン」

担任の手が喉に食い込んだ。

もう、足手まといは嫌だ。大体、俺は女の子ではないのだ。俺は担任の体もろとも、プールに飛びこんだ。力はそんなに変わらないのだから、抵抗しない訳ないだろう。水が鼻に入った。痛い。浮かび上がってきた担任の頭を押さえつける。担任も俺の頭を押さえつける。つけていたウィッグがとれて水に浮かんでいた。俺はウィッグをつかんで、担任の頭もろとも沈めた。

「レオン、そろそろ離してやらないと死ぬぞ」

プールサイドを見ると、あいねが呆然とした顔でこちらを見ている。隣に、軍服姿のハインがいた。「レオン、離してやらないと死ぬぞ」俺は担任を沈めていた手を離す。担任は水面から顔を出して、咳こんだ。

「何で助けるんだよ」

俺はハインに向かって言った。

「簡単に殺したらつまらない、もとい、殺人犯になりたいのか？」

頭に血が上がったお前を見るのも中々楽しいな」

ハインは笑った。あいねが担任に手の平を向ける。担任はハインを見ていた。

「波韻、何しに来た」

「久しぶりだな、司」

そういえば二人は同級生だった。久しぶりということは、ハインは担任の授業を受けていないのか。

「お前も殺されたいのか」

「まあそう怒るな。二人を解放してやれ」

「お前の言うことなんか聞くと思ってるのか」

「口の利き方に気をつける。この会話はこれを通して校内放送される」

ハインは胸元のピンマイクを指差した。担任の表情が険しくなる。

「はったりか」

「本当だったら困るのはお前だろ？ 今クビにされるのは本意じゃないはずだ。橋元を口説くまではな」

担任の顔が明らかに動揺した。頬が赤い。

「橋元つて、誰？」

俺はハインに尋ねる。

「この事務員だ」

そういえば生徒会室の黒いファイルに担任の好きな人として書いてあった気がする。

「お前、やめろ、それ以上言うな」

「ちなみに俺と司と橋元は同じクラスで、司は橋元が好きだったが、橋元は俺が好きで、告白されて、でも振ったという過去がある」

ハインは俺とあいねを交互に見ながら、言った。

「殺すぞ波韻」

担任の目が血走っている。あいねが手を伸ばして、担任の頭をつかんだ。

『ワプラ』

担任は悲鳴を上げた。俺も叫んでいた。目の前で火花が散って、火花のようだと思った。多分、電気の呪文だったのだろう。

「日立あいね、レオンも殺す気か」

「手加減したから死にはしないと思うけど」

暗くなる目の前で、あいねとハインが話していた。

「どうして橋元さん振ったの？」

あいねが珍しく人の話に食いついている。ハインは腕を組んで、目を閉じた。

「橋元は、男だ。男に興味はない」  
ああ、担任は、本物だったのか。

目を開けると、あいねの顔があった。髪はアップで、頭にティアラが乗っていた。俺は跳ね起きた。

「やっと起きたか」

声のする方を見ると、ハインがいた。漆黒のマントに、どこぞの貴族のようなスーツ姿だった。

俺はあたりを見回した。変な世界へタイムスリップした訳ではなく、ただの教室のようだ。窓の外は夕暮れだった。俺は机の上で寝ていて、自分が白タイツをはいていることに気付いた。こういう服、世界史の教科書で見たことがあるぞ。確かルイ十何世が着ていた。

「ハイン、お前」

俺は黒マントのハインへ向けて負のオーラを飛ばした。

「お前が気絶してる間に日立あいねに着替えさせてもらった」

今、何て言った？ 首筋が熱くなる。

「馬鹿か、お前、馬鹿だろ」

俺は叫んだ。

「冗談だ。俺がやった。大体、日立あいねにやらせたら逆セクハラだろう。お前もつと腹筋を鍛えた方がいいぞ」

「生き埋めにされてしまえ」

俺は机から降りた。とても恥ずかしい。

「というか担任はどうなって、今何が起ころうとしてるのか教えてくれ」

「司は気絶した所を確保した。今は盟に引き渡してある。取調べにはだんまりだそうだ」

結局、担任には一番聞きたかったことを聞けずじまいだ。

「何であいねを狙ってたんだ？」

「日立あいねに聞いた方が早いんじゃないのか」

ハインはあいねを見る。俺もあいねを見る。

「後で。劇が終わったら」

今、すごく嫌な単語を聞いたような気がする。

「おい、まさかとは思ってたけど、この格好は」

「白雪王子だ」

ハインは真顔だった。

「やるのか？ 本当にやるのか？」

「何を言ってる。もう体育館は満員御礼だぞ」

「というか何であいねまで。いいのか？」

「日立あいねにはさっきの貸しがあるからな」

「アドリブでいいんでしょう？」

この劇、本当に無事劇として終わるのだろうか。教室のドアが開いた。

「そろそろスタンバイだって」

ジークだった。確かジークは小人役だ。衣装は似合っているが、随分でかい小人だ。

ハインとあいねが教室を出て行く。あいねは本当に世界史の教科書のようなドレスを着ていた。似合っている。綺麗だ。

「そういえば、本当にあの時校内放送してたのか？」

俺は前に歩くハインに尋ねた。

「あれは校内放送用じゃなく録音用のマイクだ。あまり音は拾えなかったが。俺もそこまで鬼じゃない」

どちらもそんなに変わらないような気がするのだが、どうなのか。

「まあ、まだ切り札は沢山ある。司のラブレターとかな」

やっぱりこいつは鬼だと思った。俺は前を歩くあいねに追いついた。

「あいね、何で魔法封じのロープだったのに魔法使えたの？」

これが言いたかったことその三だ。

「私の魔力の方が強かったから」

さらりと言われたが、さりげなく自慢だろうか。でも、そうすると不思議なことがある。

「何で逃げなかったの？」

あいねはばつが悪そうな顔をして、俺から目をそらした。

「ちよつと先生に聞きたいことがあって、待ってた」

つまり、あいねは逃げようと思えばいつでも逃げられたが、俺が来てしまったことにより事態がややこしくなった、ということだろうか。結局俺は、あいねの足を引っ張ってしまったのか。そう考えると、足取りが重くなった。

『ただいまより、第四十三回後夜祭を開催します』

体育館に異様な雄叫びが上がる。生徒達のボルテージは最高潮だ。それに引き換え舞台袖はとて静かで、あいねが今更台本を読んでいる。

「別に全部アドリブでいいぞ。日立あいね。レオンに人工呼吸させてくれればな」

「全部アドリブなら心臓マッサージだけでいいのよね？」

あいねの声は冷ややかだった。

『プログラム一番、生徒会による劇『白雪王子』です。解説は生徒会副会長の花澤盟さん、飛び入りの祭司先生でお送りします』

劇に解説って、何だ。というか盟、一人だけ逃げたな。

「盟には司の監視を頼んだから、出られなかっただけだ」

ハインが言った。読まれている。赤い緞帳が左右に分かれていく。

『昔々ある所に、世界で一番美しい青年、白雪王子がいました』

盟がマイクを通して喋っている。ざわついていた客席が静まっていく。「出番だぞ、白雪」ハインに背中を押された。あいねはまだ台本を読んでいた。

俺は息を吸って、吐いた。もう自棄だ、恥は捨てる。俺は舞台へ歩き出した。照明が眩しい。

「松田、メイドじゃないのか」「白タイツ?」「零音君、白タイツ

似合ってるよ」何だこれ。罰ゲームか？ 舞台にはいつ作ったのか、メルヘンな城と木々のベニヤが立っていた。台詞を言わなければならぬ。俺は息を吸った。

「皆さん、こんばんは。突然ですが、最近悩みごとがあります。聞いていただけますか？ それは」

「こんな所にいたのか、白雪」

客席から悲鳴のような歓声が上がる。漆黒のマントをたなびかせ、ハインがやって来る。というか台本より出番早くないか。

「波韻様、本物、本物だよ」「もうあたし死んでもいい」「死んだら二人のラブシーンが見れないでしょ」「明日からガーターベルトにニーソックスで来ます」

駄目だ。こいつら全員駄目だ。

「白雪、呼ばれたら返事をしろといつも言っているだろう」

ハインは俺のあごをつかんだ。悲鳴が上がった。俺は鳥肌が止まらなかった。というか、この間からのこいつの行動は全部劇の練習だったのか？ それならそうであってほしい。

「すみ、ません。お義父様」

声が上がった。鳥肌が全身を駆け巡っていく。ハインは笑った。

「返事は、はい、だ」

悲鳴が上がった。ハインが喋る度、こうなるのか？ というか、俺、もう学校に來れない。あることないこと言われて、担任と同類にされるんだ、きつと。

「反抗的だな白雪。反抗期か？」

「反抗期です。というか離せ。気持ち悪い」

俺は叫んだ。

「白雪、北風と太陽という話を知っているか？」

ハインは既に台詞を喋っていない。「知ってますけど」

「人はやれと言われたらやりたくなくなるし、寝ると言われたら寝たくなくなるし、離せと言われたら離したくなくなる生き物だ。という訳で離さない」

「長いんだよ。しかも北風と太陽関係ないし」

「人に何かをしてほしい時は疑問形にしる。離してもらえませんか。日本語は思いやりに溢れているな」

俺はハインの手をつかんで、振り払った。

「お前の言うことなんか聞くか。お前が来てからというもの、空は荒れ、木々は枯れ、作物は不作で、うちのメイドは半分入れ替わった」

「不作を俺のせいにするな。メイドは俺のせいだが、別に入れ替わっただけならいいだろう」

「古株の人がみんな辞めていってしまったって、引き継ぎがうまくいってなくて、仕事が回ってないんだよ」

「どこかの企業のような」

俺はハインを睨む。

「俺はお前に屈しない」

ハインは鼻で笑う。

「せいぜい足掻け。いずれお前も亡き者にしてやる。世界で一番美しいのは、俺だ」

「美しいです、波韻様、美しいです」「波韻様、あたしも亡き者にして」

悲鳴と共にハインは舞台袖に消えていった。俺は精神力を奪い取られた。客席に向き直る。

「ええと、それで、さっきの話の続きですが、最近の悩みごとはよく眠れないことです。毎晩夢にあの義父が出てきて、目が覚めます」

「ラブラブじゃん」「ラブラブだ」「私生活でもそうなのかな」

待て。私生活ではそんなことはない、決して。もうこれ以上誤解を生みたくない。

『そこで白雪王子はお抱えの心療内科医の診察を受けることにしました』

盟が言った。何だかりアルで嫌だ。

舞台が暗転した。台詞はもうほとんどアドリブだが、話の流れか

らは外れていないので、俺はこの場で待機だったはずだ。黒子が舞台のベニヤを片付けていって、俺は用意された椅子に座った。

照明が戻ると、俺は白衣姿の盟と、担任と向かい合っていた。背景は白く、ベニヤの薬棚やら本物のベッドやらが置いてある。

「盟先輩好きだ」「白衣好きだ」「祭先生、俺と代われ」

逃げたんじゃなかったのか。俺は盟に目で尋ねた。舞台からは見えない位置で、盟の手と担任の手が手錠で繋がっていた。あいつ、何やらせてるんだ。

「王子、大変申し上げにくいのですが」

白衣の盟が言った。解説の二人が舞台上上がっているのに、誰も何もつっこまない。いいのか？

「別にはつきり言ってくれていいです」

「そうですね。あなたは軽症うつ病です」

「軽症うつ病とは軽度のうつ病だ」

担任が言った。お前も参加するのか。俺は心の中でつっこんだ。

「原因はお分かりですよね？」

「そうですね。あいつのせいでしょうね」

「噂はかねがね耳にしております。大変陰湿ないじめを受けているとかいないとか。突然背後からタックルされたり、盗撮写真をメイダ達に販売されたり、お風呂に入っている時に着替えの服を隠されたり」

よく今まで耐えてきたな、王子。俺だったら耐えられない。

「で、結局どうすればいいんでしょうか」

「しばらく別荘で療養なさってはとうですか？ 城のことは私に任せ」

「いや、お前には任せないけど。療養か。そうした方がいいのかもしれないな」

「では早速ご用意を」

舞台が暗転する。俺は一旦、舞台袖に退場する。

『こうして、白雪王子は避暑地の別荘で療養することになったので

した。残酷な運命が待ち受けていることも知らずに」

盟がマイクで言った。舞台上の盟と担任にスポットライトが当たった。担任はいらぬはずだが、手錠でつながれているので、仕方がない。もう一つ、スポットライトが舞台を照らした。椅子に座って、脚を組んで頬杖をついたハインだった。客席から悲鳴が上がる。「という訳で、王子は別荘へ向かいました」

盟が言った。

「白雪も鈍いな。あれは俺なりの愛情表現なのに」

「性格悪いですね」

「何とでも言え。趣味だ」

ハインは組んでいた脚をとり立ち上がる。

「例のものが用意でき次第、俺も別荘へ向かう」

「分かりました」

「待っている白雪。せいぜい小人と仲良く遊んでいるがいい」

ハインは舞台袖へ歩き出す。「あなたも」盟が言って、ハインは足を止める。

「身边にはお気をつけて」

舞台が暗転する。

『こうして、義父も白雪王子を亡き者にする計画を着々と進めるのでした。女医の企みも知らずに』

そんな設定だったのか女医。俺は心の中でつつこんだ。ハインが舞台袖に戻ってくる。

「あれだけ嫌がってた割にはいい演技じゃないか、白雪」

「役名で呼ぶな」

しかも半分は演技ではなく素だ。あいねはまだ台本を読んでいる。既に台本はあつてなきものになっているが、大丈夫だろうか。

舞台が明るくなる。背景のベニヤは森と家だ。というか、誰が作ったのだろうか。ハインのファンクラブか？ 舞台の真ん中に丸テーブルと椅子があり、ジークが座ってお茶を飲んでいた。

「やっぱり紅茶はミルクだな」

「独り言か？ 俺は小道具のトランクを持って舞台へ歩き出す。」

「こんにちは。小人の家はここですか？」

王子なのに従者もないのはどうかと思うが、人手が足りないの  
で仕方がない。そして台詞を言った後に気付いたが、ここは自分の  
別荘のはずだ。何で尋ねないといけないんだ。

「いや、白雪王子の別荘です」

ほら、つっこまれた。ハインめ、台本が間違ってるぞ。

「そうですね。療養のために来たんですが」

「ああ、あなたが白雪王子ですか？ お話は聞いてます。俺はこ  
の管理人のジークです。よろしくお願いします」

本名なのか。そして小人ですらないのか。

「王子もお茶をどうですか？」

「じゃあ、いただきます」

俺は椅子に座った。ジークが紅茶を注いで渡してくれる。

「何で療養されることになったんですか？」

俺は出された紅茶をそのまま飲んだ。本当に紅茶だった。

「ちょっと軽症うつ病で」

「何で軽症うつに？」

「義父とそりが合わなくて」

俺は紅茶をテーブルに置いた。ジークも飲んでいた紅茶をテー  
ブルに置く。

「噂はちらつと聞いてますけど。背後から肩を叩かれて、ほっぺた  
に指を突き刺されたり、突然ベッドがピンクの天蓋付きのものに替  
わってたり、オムライスにケチャップで好きな人の名前書かれたり」  
スケールの違いこそあれ、どれも地味に嫌だ。

「まあ、しばらく義父と離れてのんびりしますよ」

「まあ、離れてみるのもいいかもしれませんね。離れてみて気付く  
大切さって、よく言うじゃないですか」

視界が揺れた。目をこすると、体が落ちる感覚がした。

「すみません。王子」

ジークの声が、聞こえた。

照明が眩しい。揺れる視界の中に、あいねが立っている。

「久しぶり。お姫様」

体を動かすと、動かなかった。首に何か当てられて、俺は振り返った。ジークが、座り込んだ俺の体を支えて、俺の喉をつかんでいた。

「おはよう。王子」

ジークは笑った。

「あなた、誰？」

あいねが言った。動揺しているように見える。紅茶を飲んでジークと話した後から、記憶が飛んでいる。まだ劇は続いているのか？

「ジーク・フォンフィリア。次期女王の側近だ」

何を言ってるんだ？ 舞台袖でハインが険しい表情でこちらを見ていた。ハインがあんな顔をしているということは、何かあったのか。

「何がしたいの？」

あいねの瞳は、細い。けれど、平静ではない。

「忘れてるのかしらばっくれてるのか知らないけど、丁度いいからみんなに分かるように説明するよ。ここではない場所に、一つの国があった。王政に反発した民衆が反乱を起こして、当時の王政は倒された。王族は大部分処刑されたけど、一人娘の姫だけが見つからなかった」

客席は、静かだ。

「それからしばらく統治者不在が続いて、王政が復活することになった。女王に就くのは、もちろん俺がお仕えしている方のはずだった。けれど、民衆と王族の血脈が邪魔をした。何だかんだ不満を言ったけど、やはり王族が統治しなければこの国は駄目だ、女王に就くのは、どこかで生き延びている、一人娘の姫だって」

これは、劇ではない。

「俺は世界中の遠見師に尋ねた。姫はどこに逃げたのかって。それで、やっと、見つけたんだ」

「あいねは、うつむいている。」

「アイネ・リルン。探したよ。まさか、こんな所にいたなんて」  
「あいねは顔を上げる。」

「それで、わざわざこんな所まで何をしに？」

「俺と一緒に来てほしい。あいつらは納得しないんだ。君の首を持っていくまでは」

「何を、言ってるんだ。」

「あいねを狙ってたのはお前だったのか？」

「俺は叫んでいた。」

「そっだよ」

背後から穏やかな声が聞こえた。

「担任は？」

「あいつはこっちでできた知り合い」

「怪文書を出したのは？」

「それもあいつ。動物を操ったのもそう。あ、いや、一回目だけ俺だったかな。一回目って、隣のやつね。あれでもあまりにも目立ちちゃったから、こっちに来てあいつに力を貸して、代わりにやってもらってたって訳。でも捕まっちゃったから、そろそろ自分でやるうかと思って」

「国って、どこのことだ」

「レオンが知らない世界の国だよ。もういい？」  
「体を引き上げられて、立たされた。体が重い。紅茶に一服盛られたようだ。」

「じゃあ、アイネ・リルン、一緒に来てくれ」

「ジークの手が俺の喉をつかむ。あいねと目が合って、すぐにさらされた。」

「また、俺なのか？俺のせいであいねが苦しむのか？もう嫌だ。俺は、守られる役じゃ、ない。」

ジークの手をつかむ。体育の授業と同じように、背に相手の体を乗せて、投げた。どよめきが起こる。

「零音、離れて」

あいねが叫ぶ。

「やってくれたな、レオン」

仰向けのジークが俺に手を向ける。俺はジークの首に手をかけた。ジークの目が見開く。「零音」あいねの叫び声が聞こえる。ジークの手が俺の手首をつかむ。

『透の空中 風 塵 以て我が手に巻き起これ アリス』

ジークの体から突風が吹き出した。そこかしこから悲鳴が聞こえる。体が浮いたけれど、手は離さない。離してしまつたら、あいねが。

腕に鋭い痛みを感じて、体が飛ばされた。背中が痛い。壁にぶつかったらしい。

風がやむと、舞台上、しゃがみこんだジークと、ジークに手を向けたあいねと、俺に銃を向けているハインがいた。

「レオン、落ち着け。さつきも言っただろう」

「落ち着いてられるか。こいつを止めないと、あいねは」

客席が騒がしい。「生徒は一旦教室に戻りなさい」教師達の叫び声が聞こえる。

地面が揺れた。この揺れは、知っている。体育館の天井にひびが入っていく。

舞台上、担任が歩いてきた。盟の腕を引いて、盟に果物ナイフを向けていた。

「ごめんなさい、会長」

ハインは銃を担任へ構え直す。

「司、お前、何で」

「お前を殺すためだ」

ハインは薄く笑う。

「そんなに嫌われてたのか」

「好きだよ。でも、俺にはお前がうらやましすぎて、もう、耐えられない。橋元のことともそうだし、お前の生き方が、うらやましい。だからもう、死んでくれ」

地面が揺れて、天井が壊れた。瓦礫が降ってくる。角が、見える。天井の穴から見えたのは、体育館と同じ背丈のマンモスだった。あいねが走る。「待て」ジークが立ち上がる。俺はジークに思い切りタックルした。倒れたジークに馬乗りになって、両手首をつかむ。

「邪魔するのか、レオン」

「するよ。あいねは渡さない」

「お前のことは好きだったけど、残念だな」

「何が残念なんだよ。大体やり方が滅茶苦茶だ。誰でも巻きこんでいいと思ってるのか？」

「それはお前も、同じだろ」

視界が歪んだ。ジークの瞳が何重にも見える。

「さっきお前は俺を殺そうとした。本気で」

目で見ているものが、目から切り離されたように少しずつ遠ざかっていく。

「レオン。アイネ・リルンを殺せ」

俺の手は、ジークの手を離した。体が勝手に動いている。俺の体はあいねに向かって走り出した。

「ジーク、何した」

俺は叫んだ。

「心と体を切り離れた。運がよければ止まるかもな」

「あいね、俺を気絶させろ」

あいねは振り返る。見開いたエメラルドの目と、目が合った。俺はあいねの体を突き飛ばして、仰向けに倒れたあいねの首に、手をかけた。感覚はある。けれど、止まらない。手に力が入る。あいねの表情が歪む。

「駄目だ、あいね、あいね」

マンモスの雄叫びが響いて、舞台が影に覆われる。「全員殺せ」

担任の声が聞こえる。

「畜生、止まれ、やめろ」

手は止まらない。どうして、こうなった？ どうして俺はあいねを苦しめることしかできないんだ？ あいねが苦しそうに俺を見ている。涙が、出た。自分の手を止められないのに、涙が出るなんておかしい話だ。涙が、落ちる。あいねの指先が、俺の首に触れた。首を引き寄せられて、唇で、唇を、塞がれた。

口の中で、あいねが何か言ったのが聞こえた。手が、緩んだ。

『アリス』

あいねの体から突風が発せられて、体が飛ばされた。壁に背を打ち付ける。あいねは咳こみながら体を起こして、マンモスを見上げる。ジークがあいねへ向かって走るのに、俺はジークに思い切りタツクルした。

「レオン、いい加減にしろ」

「お前がいい加減にしろ」

倒れたジークのみぞおちを思い切り、殴った。ジークは呻いて、目を閉じた。俺は担任へ向かって走った。

「レオン」ハインが叫ぶ。「この女がどうなってもいいのか」俺は担任の顔を、思い切り殴った。担任の体が倒れて、盟が悲鳴を上げる。床に飛んだ果物ナイフをハインが拾い上げる。「ごめん」盟が担任と手錠で繋がれているのを忘れていた。

「司、あれを止めろ」

ハインは担任の額へ銃を向けた。担任は笑う。

「止め方なんて知るか。日立に頼め」

ハインは舌打ちする。

『デルディウス』

光があたりを包む。金切り声がして、耳を塞いだ。見ると、マンモスの顔が焼けてただれている。地面が揺れて、あいねは苦しそうな表情で舞台に膝をついた。

俺はよろけながらジークの方へ走った。倒れているジークの脚を

持って引きずる。あいねの側まで来て、ジークの頬を張り飛ばした。

「ジーク、ごめん、やっぱり起きてくれ」

ジークは目を開けた。不機嫌そうだ。

「あいねと一緒に魔法を撃ってくれ。できるんだろ？」

ジークは俺を見たまま、答えない。

「あれをどうにかしないと、全員死ぬんだ」

「馬鹿？」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった。ジークは上体を起こす。

マンモスの足が舞台上が上がってきて、地面が揺れる。

「別に俺はここにいる全員が死んでも構わないし、俺だけ逃げれば目的達成だ。せっかく気絶させたのに、何で起こしてるんだよ」

確かに、そうだ。何で気付かなかったのだから。馬鹿と言われても仕方がない。ジークは息を吐いた。

「まあ、お前のそういう所嫌いじゃないし、お前も嫌いじゃない」

ジークは立ち上がる。

「しょうがない。やってやるよ。お前の為に」

ジークは、笑っていた。

「藤崎、裏切るのか」

担任が叫ぶ。

「あんたよりレオンの方が大事だからね。力貸しちゃった俺にも責任あるし」

「ふざけるな、話が違う」

「うるさいな先生。大丈夫だよ、どうせすぐ忘れちゃうんだから。」

アイネ・リルン、デルディウスやるぞ」

あいねは立ち上がる。

『命ずる 原子を読み知とする 知を組み成型する』

小さな声が二つ重なる。

「やめろ」

担任がこちらに走ってくる。盟が引つ張られて悲鳴を上げる。ハインは銃を担任へ向けて、撃った。担任の体が崩れ落ちて、顔面か

ら舞台の床を滑った。俺はハインを見た。

「安心しろ。エアガンだ」

『知と原子は等しくあれ』

マンモスが足を上げる。俺は頭上の足を見上げる。

『放て デルディウス』

二人を中心に光が爆ぜた。真っ白になる。風の音と、金切り声が聞こえた。

光が収まると、頭上の足が止まっていた。足が崩れて、砂になって流れていく。マンモスの体も輪郭が曖昧になって、流れていく。砂が流れ落ちて何もなくなると、信じられない程、何も聞こえなくなった。暗い体育館の客席には、もう誰もいない。

あいねが膝をついて、俺はあいねの背を支えた。ジークを見上げると、ジークは笑って、舞台から飛び降りた。ほぼ全壊した体育館の入り口へ歩いていく。

背後で金属音がして、振り返った。担任が床へ手をついていた。手錠が外れている。

「警察に引き渡すのか？」

「できればなかったことにしたいが、そうだな」

担任は何も言わない。

「まあとにかく今日はいい。全員帰って、よく食べてよく寝ろ。司は放っておくと自殺しそうだからうちへ来い」

俺はあいねを見る。

「ごめん」

あいねの首を見る。赤く、指の痕が残っている。あいねは俺を見上げて、俺の頭に手を置いた。髪の毛を撫でられる。あいねは、微笑んだ。

「私も、零音の家のご飯、食べたい」

泣きそうになった。俺は頷いた。あいねが笑ってくれただけで、もう充分だ。体育館を見ると、ジークはいなかった。ほぼなくなっってしまった天井から、夜空が見えた。

俺は、恐る恐る教室に入った。

「おはよう」「松田君おはよう」「松田君」

女の子が一人駆け寄ってくる。俺は身構えた。

「先週の劇、よかったよ。松田君もよかったけど、でもやっぱりあたしには波韻様がいるし。というか、この際はつきりさせておきたいんだけど、松田君って波韻様と日立さん、どっちが好きなの？」

情報量が多くて、頭の中で処理できなかった。気付けば教室中の視線が俺に集中している。今朝から感じていた違和感が、徐々に形になっていく。

「ええと、あの、まずハインとは兄弟で男だし、まったく何もないから。というか近親で男同士はかなりまずい気が」

「松田君、女の子の夢を壊さないでよ」

女の子は腰に手をあてて頬を膨らませた。そんな夢だったら壊れてしまえばいい。

「それより、何であいねが好きとかそういう話になってるんだ」

「とぼけるなよ。日立さんとちゅーしてたじゃん」

野次が飛んでくる。やっぱり、何かおかしい。確かに事故みたいなキスはしたが、あの時まともに見ていた生徒がいるとは思えない。というか、話題にすべきはそこじゃない。

「いや、あの、マンモスとかいかなかったっけ」

「何の言い訳だよ零音。苦しいぞ」

「いや、体育館壊れてただろ」

「あれは老朽化だって先生言ってたよ。うちの学校、耐震基準大丈夫かなあ」

やっぱり、おかしい。これは本人に聞くしかなさそうだ。でも、もう学校には来ないかもしれない。

「あ、日立さん」

教室の入り口にあいねが立っていた。

「日立さん、松田君と付き合ってるの？」

女の子があいねに詰め寄る。よく見ると、女の子はガーターベルトにニーソックスだった。あいねは眉をひそめて俺の方を見る。「付き合ってるの?」

教室中の視線があいねに集中している。あいねは俺から視線を外して、無表情に戻った。

「付き合っていない」

教室が、静まった。あいねは自分の席へ歩いていった。

「振られた」「ごめん、零音」「やっぱり、演技は演技だよな」

みんなの言葉が心の傷にしみる。自分がとてもいたたまれない。

「おはよう」

肩を叩かれた。ジークだった。俺は反射的にジークの肩をつかんで揺さぶった。「零音、八つ当たりは駄目だぞ」野次が飛んできた。違う、八つ当たりではない。決して。

「何かしたな?」

まわりに聞こえないように声を小さくした。ジークは笑った。

「よく分かったな。劇を最後までやったように記憶を変えた。関わった人全員だから、さすがに疲れたよ」

「気付かない訳ないだろ。ニュースでも何も言っていなかったし。神社のお祭りの後もやったな?」

「よく分かったな。すごいすごい」

「いや、お祭りの時は一瞬騙されかけてたけど」

「さすがに疲れたから、当分休養しないと駄目だ」

俺はジークの肩から手を離れた。

「またあいねを狙うのか」

「狙わないよ」

思っていた答えと、違った。

「レオンの好きな人だから、狙わない」

「何だそれ」

「だって、レオンが相手じゃ、勝ち目ないじゃん」

ジークは歩き出す。俺はジークの腕をつかんだ。

「ここからいなくなるのか？」

「残念だけど、後半年はいるよ。卒業までいるかどうかは考える」「卒業までいるよ」

不思議だ。何であいねを殺そうとした相手を引き止めているのだらう。

「じゃあ、レオンもちゃんと卒業しろよ」

俺は言葉に詰まった。「いや、悩むなよ」俺は頷いた。

「分かった。お前と一緒に卒業する」

「そうこなくっちゃ」

ジークは、俺の知っている顔で、笑った。

帰りのホームルームが始まった。担任はハインの手引きにより、なぜか俺の家で療養中なので、副担任がやって来た。ほぼ全壊の体育館については、今朝、老朽化ということで説明があった。というか、老朽化であそこまで全壊する訳ないだらう。誰か気付けよ。いや、でもこれがジークの力なのか。たいしたものだ。担任も落ち着いたら復帰してくるのだろうか。

ホームルームが終わった。俺は、鞆を持って早々に教室を出て行くあいねの方へ走った。

「あいね、一緒に帰ろう」

「零音、振られたのにめげないな」「しつこい男は嫌われるぞ」

背後で囁きが聞こえるが、無視だ。あいねは俺を見て、歩いていつてしまった。

「また振られた」「振られた」

「うるさいな」

俺は背後に向かって叫んだ。あいねの後姿を追いかける。階段を降りていくあいねの腕をつかんだ。あいねは振り返る。目が、合う。あいねは俺の手を振り払った。まだ負けない。あいねの後についていく。

校門を出た所で、あいねは振り返った。

「零音、恥ずかしい」

怒っている。というより、もしかして照れているのか？ 顔が赤い。「ごめん」俺はあいねの横に並んで歩いた。あいねは何も言わなかった。

「首、大丈夫？」

あいねの首には赤い痕が残っている。俺の手の痕だ。色が白いから余計に目立つ。昨日も謝ったのだが、あいねを見るたびにそのまま痕が残ったらどうしようかと気が気でない。

「別に、痛くないし、零音は悪くない」

「いや、そうかもしれないけど、実際やったのは俺だし」

「あんまり謝られると邪魔」

あいねなりの優しさなのか、本心なのかよく分からない。俺は大人数く返事をした。

「ジークは卒業までいるって」

あいねは興味がなさそうな返事をした。

「でも、もうあいねのことは狙わないって」

「何で？」

あいねは怪訝な顔をした。『レオンの好きな人だから、狙わない』ジークの言葉が蘇って、俺は答えられない。

「あいねは、元の世界？ に帰るの？」

「帰らない。亡命してきた時から、私が生きていくのはここだって、もう決めたから」

「俺があいねを守るよ」

つい勢いで言ってしまった。気付いた時にはもう遅い。恥ずかしくてあいねの顔が見れない。

笑い声が聞こえた。あいねは笑っていた。

「どこでもついてくるの？」

恥ずかしい。けれど言ってしまったものは仕方がない。俺は開き直った。

「ついていくよ。好きだから」

俺は、目をそらさなかった。あいねの顔から笑顔が消えていく。あいねは立ち止まった。俺も止まる。

「何、で？」

あいねの声はとても小さかった。

「何が？」

「好き、なの？ 誰を？ 私を？」

「あいねしかいないだろ」

あいねの頬が、赤い。あいねはそのままうつむいた。

「何で？」

「いや、何でって言われても、そうだから」

顔が熱い。けれどここでごまかす訳にはいかない。

「別に、友達でいいから、俺と、友達になって、ください」

あいねは顔を上げる。俺を見る。

「ありがとう。嬉しい」

見逃してしまいそうな程かすかに、あいねは、微笑んだ。体が、熱くなった。

「あいね」

あいねは首を傾げる。

「抱きしめていい？」

エメラルドの瞳が開く。そのまま睨まれる。

「嫌。絶対嫌」

思い切り叫ばれた。あいねは歩き出した。俺はあいねを追いかける。

「じゃあ一つ聞きたいことがあるんだけど」

「何」

あいねは俺を見なかった。頬が赤い。怒っているのか照れているのかよく分からない。

「劇の時、その、したやつは、何？」

こんな説明で伝わるのか分からないが、恥ずかしくてちゃんと答えない。

「あれは浄化の呪文をかけただけ」

「浄化の呪文ってああいう風にしないとかからないの？」

「そんな訳ないでしょ。あれはどうやって零音の気をそらすか考えたら、ああなっただの」

あいねは叫ぶ。怒っているのではなくて、恥ずかしいのかもしれない。

「そっか。目は覚めたよ。白雪姫ばりに」

あいねは答えない。俺の方も見ない。

「いつか、今度はちゃんと、俺から、するよ」

あいねは立ち止まった。俺も足を止める。あいねの顔をのぞきこんだら、真っ赤だった。目が合った。睨まれた。と思ったら腹に激痛を感じた。あいねの足が思い切りみぞおちに入っていた。俺は腹を押さえてうずくまる。

「馬鹿、変態、イギリス人」

あいねは走り出した。腹を蹴られたので、上手く息が吸えない。

「あいねだって日本人じゃないじゃん」

俺は自分が笑っていることに気付いた。立ち上がって、あいねの後姿を追いかけた。

#### 4 (後書き)

あとがき - 兄 Fever -

終わりました。おはようございます。電車内でこういうものを書くのはいかなものかと思いますが、通勤時間は有効に活用しなくてはいけません。(話は基本的に通勤時間帯に電車内で書いてます。2010/7/6追記)

そんなこんなで終わった学園ラヴィングGBTですが、当初本編の短いおまけ話を書こうと思って考えたうちの一つだったんですよ。一つ目は本編に吸収されてしまった翻訳機をなくす話。あれ番外だったんですよ……！GBTは4で完結と思っていて、その通りになったんですが、やっぱり、長い。長かった。(ちなみに学園キノみたいにしなかった。2010/7/6追記)

話は大体計画通りに落ち着きました。途中まではあいねが月に帰ったりする予定でした。みんなよい感じに暴走してくれて楽しかったです。というか兄、大分私に偏愛ハイされていて、大活躍です。疑惑のあった彼ですが、多分誰でも好きにはなれますが、私がそっち方面を書けないので無理です。書いてる途中に笑い出す。いや、でもやっぱり女の子が好きだよ。

登場人物はほぼ本編に出てくる人達ですが、祭司さんは、司祭です。冒頭にちらっと出てきた。脇役がこんな重要なキャラに……！そして体育教師は大将です。祭司さんはそっち系の人でしたが、司祭は普通の人なので誤解しないで下さい。話の進行上やむを得ず……。兄に「橋元は男だ」を言わせたくて。酷いですね。橋元さんにモデルはいませんが、直前まではちゃんと女の子だったんですよ……！

お気に入りには兄がレオンのぎりぎり写真を販売すると脅すシーン。そんなあなたが好きだ。後、戦隊物？ 突撃戦隊スイハンジャーは突撃となりの晩御飯へのオマージュです。見たことないけど。兄が観たDVDは最初ドラゴンボールでした。でもアニメを勝手に出すのはどうかと思ったので、スイハンジャーが誕生しました。最初、登場シーンがロッキーのテーマとかでした。

ちゃんと普通のらぶも書きましたよ。青春な学園を書きたかったので、お祭りと文化祭を入れました。後、プールと劇。青春だ！ スクール水着とかうなじとかガーターベルトとかレオンの妄想が溢れています。高校生ということで大目に見てあげてください。みんな留年しまくってるけど。ちなみに劇の兄も大好きです。

最後らへんはらぶらぶしてて私もノートを投げそうになりました。いや、でもあの付き合つか付き合わないかのらぶらぶが書きたかったです。

終わりに、やっぱりらぶはよい。

2009/7/30 くらい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7406x/>

---

学園ラヴィング-GBT-

2011年10月23日03時22分発行